

曼珠沙華

※曼珠沙華（まんじゅしゃげ）（仏法用語）

天上に咲くと言う花の名。四華の一種で、見る者の心を柔軟にすると言う。

壺之書 鬼子

その町内で「美人は？」と問えば、十人が十人「ああ、鳴神（なるかみ）さんのところのあさぎさんと遙日さん！」そう即答する。鳴神姉妹の美貌は町内で知らぬ者がない。ここで「では、伴侶にするならどちらが良い？」そう尋ねると、皆、無言で視線を交わし合い、押し黙る。

「——気立ては、あさぎさんだよな？」

「そうだな。誰にも分け隔てなく笑って挨拶をしてくださる」

「遙日さんは——あさぎさんより美人だが、人離れしている」

「そうだな。挨拶も黙礼だけで喋らない。あれだけ美人であれだと、声もかけられないよな？」

「しかし——あさぎさんは……」

「ああ、剣を取ると別人だ。あの気合いが遠くから聞こえるだけで、金玉どころか寿命まで縮む思いがする」

「ふだんでも柔和に見えて……」

「そうだ、話していても隙を見せると斬られそうで、冷たい汗が止まらない」

これである。ちなみに老若男女を問わず、噂話ですら、この姉妹は敬語で語られる。

ずば抜けた美貌で町中の人々の羨望の眼差しを集める鳴神姉妹だが、対等の女性と受け止める人は皆無だ。いや、既に同じ種類の人と思われていない。羨望と崇拜。そして畏怖の対象になってしまっている。何より、ここが問題だが、二人とも二十代の若い女性なのに町中の人々が彼女らにまず抱くのは、原初の神に対するかのような畏怖なのだ。

鳴神家の主人、鳴神威三郎は現役時代に三回、剣道の全日本大会を制した強者で、寄贈された剣道場で師範を務める。県警の剣道部にも師範として週三回招かれている。子供の頃はそこそ天使のように可愛かった愛娘に剣の手ほどきをしたのは彼だ。愛妻の八千代さんも現役時代は全日本大会の常連であった猛者である。

彼らが自らの娘の才能と器に、親馬鹿とも言える期待を持ったのは止む得ぬ話だ。

が、天使のような容姿をした姉妹の器も才能も、両親の期待を受けるだけに甘んじるものは無かった。その才は期待を凌駕した。親は子供の過ぎた才能には本能的に反感を抱く。それ

どころか潰そうとする。それが親の身勝手と言うものだ。

二人の姉妹が小学校に上がった時には、鳴神威三郎の娘に対する剣は狂気を帯びていた。少なくとも周囲にはそう見えた。

体格では子供の娘を満身の力で突き飛ばし、倒れた所を竹刀で無茶苦茶に叩き付ける光景が見られるようになった。道場に通う体大生が数人がかりで引き離さねばならぬ程の狂気を帯びていた。リンチに等しい稽古にあつても幼い美少女の姉妹は泣くことをしなかった。目は青く冷たく光り、無表情で取り乱さない。稽古を嫌がることもなかった。

彼女らは父を信頼していた。幼いから常識も知らない。これが剣と言うものだと言った。威三郎にとっては皮肉極まりない話である。

鳴神道場の門下生は、この二人の美しき幼い神の使いのような姉妹の剣への態度に、ようやく驚愕を覚えるようになった。幼女なのだ。「痛い」と泣けば威三郎とてこのような狂気に陥らなかつたであろう。が、天使の美しさと威厳を生まれながらに持つ姉妹は、押し黙り、氷を思わす青光する瞳で威三郎を見据える。門下生達はこの二人の態度が父をして狂気に貶めていくことを悟った。

剣技とは、突き詰めればいかに効率よく相手を斬り伏せるかと言う点に集約される。

鳴神あさぎは小学校五年生で化けた。

いつもの通り、父に勢い良く転ばされ、地に倒れた時、猫のようにくると受け身を取った。中腰の姿勢で、飛びかかる父に初めて反撃した。脛を少女とは思えぬ打ち込みで薙ぎ払った。脛への打突の痛みは筆舌し難い。

威三郎は堪らず、道場の床板に突っ伏した。

その打突の音だけで、衝撃が骨に響くものであることは、その稽古を見守っていた猛者には分かった。彼らは戦慄した。小学生の少女が放てる打突の域を超えていたのもあるが、彼らに戦慄したのはその剣筋であつた。外側から力任せに振り回したものではない。開いた父の足の内側から打った。それは真剣で相手の肉体を叩き斬る達人の剣筋であつた。内側には静脈が集中する。実践剣術はそこを打ち込むように体に教え込むが、あさぎは天性の才で無意識にそれを会得していた。

このとき、あさぎは終始無言で叩きのめされていたのと打って変わって、「きええええ！」と言う、原初の恐怖を呼び起こす化鳥の叫びを上げて、高く跳躍した。竹刀を逆手に持っている。無論、こんな構えは誰も教えていない。あさぎの本能がこの構えを取った。切っ先に全体重を掛けて、あさぎは落下する。その剣先が狙うのは、倒れて露わになった威三郎の喉仏だ。

「やめろ！」

誰かが叫んだ。無駄だ。止めようもない。あさぎの切っ先は父の喉仏を潰した。威三郎は大咯血した。が、あさぎは、生まれて初めて見たであろう鮮血に怯む様子もなく、そのまま父に

馬乗りになると、その面をはぎ取り捨てた。剣道では面を外されるのは完膚無き敗北と見なされる。

あさぎは父に跨ったまま、少女の無邪気さで呵々大笑する。

「やった♪ やった♪ やっと、パパから一本取ったよ！ パパ、褒めてよ！ 寝てないで褒めて！ いい子。いい子して！」

この時のあさぎは、父がすでに人事不省に陥っていることを理解していない。これまでの虐待をあさぎは父の愛による稽古と受け止めていた。あさぎに取っては、超人に思っていた父が倒れると言う発想が無かったのだ。

剣の世界では、ある一線を越えると飛躍的な進歩を遂げることがままある。鳴神あさぎもその例外ではなかった。

いや、言葉を翻そう。彼女は例外だった。

彼女の剣技の進歩は常軌を逸していた。

鳴神道場の名誉顧問として招かれている老剣士・宮崎春雪はこう言った。

「そもそのスタート地点が違う。あさぎちゃん、幼稚園で歩法を完璧に習得していた。そして才能と言うのか？ 剣を習得する速度が化け物だ。我々、常人が16ビットのコンピュータなら、あの娘は最新の64ビットのCPUを積んでいる。我々の剣技を見るだけで習得している。そして剣は体格差や腕力差を技で超えることに神髄がある。恐ろしい話だが、あさぎちゃんは鳴神威三郎にただ叩き伏せられていたのではない。冷静にあの達人の剣筋、体裁きを、見取ることでも打ち破る術を見いだした。そして、これこそが問題じゃが、あの娘の剣は、剣道のそれではない。人を斬ることに特化した修羅の剣技じゃ。立ち会いを見て分かった。あの気迫の前では、生半可な技を出すことも適うまい。お前ら、今後、あの娘との立ち会いを禁ずる。言っておくが、あの化生の為ではない。お前らの為じゃ。お前らは日本剣道界をこれから支える義務がある。じゃが、今のあの娘と立ち会えば、お前らの剣は性根で折れて、剣を取る気力も奪われる」

宮崎春雪は小学五年生の少女を『化生』と呼んだ。もう手が付けられない化け物だと言ったのだ。「では、幼い彼女をこれからどうするのです？」その問いに、老剣士は答えた。「古流には修羅が群れなす魔境がある。親元を離してそう言う魔窟に預けるしかあるまい。それでも…あれ程の修羅。折れるとは思わぬが。あれは百年に一人の怪物じゃ。剣が物を言った時代ならともかく、現代では忌み子じゃ。哀れじゃが…。二天様ほどの位のお方でなければ育てられまい」

鳴神あさぎは紆余曲折の後、柳生流に預けられることになった。彼女は小学生から中学卒業

までの思春期を、その修羅を落とすために幽閉されることになった。父親である鳴神威三郎は、ただ一言「頼みます」と言う一言で娘を放逐したのだ。

しかし、若い少女を赤の他人の下に預けるには様々な手続きが必要だ。実際、鳴神あさぎが奈良の山中の柳生の里へ送られるまでには三ヶ月を要した。名だたる剣豪揃いの鳴神道場の中にあつて、誰の指導も受けられなくなったあさぎは、それでも道場を休まず、鏡の前で黙々と素振りをした。その竹刀の風切り音だけで、道場の門下生は肝を冷やした。そんな孤独のあさぎの前に立ったのは、妹である鳴神遙日だった。

幼いなりに成り行きを悟っていたあさぎは、修羅を思わせぬ、愛おしむ態度で妹に稽古をつけた。自分が得た剣技の百分の一でも妹に注ぎ込もうとする姿は、心優しい門下生の涙を誘った。

が、そう言う美談で話が終わるほど、この姉妹の器と才能は甘くなかった。全日本代表の現役の男性剣士ですら、幼女とも言える鳴神あさぎと竹刀を併せれば、蛇に睨まれた蛙になるのだ。いかに愛おしく接したとしても、あさぎの剣気は抑えられる性質のものではない。遙日は姉と竹刀を合わせる度に、魔物と対峙する恐怖を深く植え付けられた。それでも、姉愛おしさに稽古に励んだ。遙日も父・威三郎をして恐怖に貶める器の持ち主であった。姉との三ヶ月の稽古は当然、彼女の剣を変えた。いや、精神を変えてしまった。

姉が柳生へ赴いたその日。遙日はまず父と対峙した。

小学二年生の小娘に右上段の構えと言う大人げない構えを取った威三郎だが、愛娘の眼を見て戦慄した。青く底光りするその眼には一切の感情がない。威三郎は自分の心の内が全て読まれる恐怖を覚えた。

恐怖から、気を練り足りない大技の面を、威三郎は不覚にも放っていた。それでも相手は小学生になったばかりの幼女だ。その面は落雷の勢いで頭頂へ落ちる。遙日は叩きのめされる筈だった。

威三郎は大きく空振りしてたらを踏んだ。

威三郎は何が起こったのか、理解出来なかった。彼の目には娘が霧散して消えたように見えた。

「鳴神！ 何をしておる！」

道場の板が震える老剣士・宮崎春雪の叱責に、威三郎は我に返った。と、同時に大きく左に飛んでいた。何の気配も無く、竹刀もだらんとぶら下げた状態で遙日がすぐ右横に立っていたのだ。

（———なんだ？）

こんな体裁きは長年の剣道生活でも経験したことがない。遙日は竹刀を下げた状態で、慌て

ふためいて跳躍した父にゆっくりと視線を移す。なんの感情もなかったその眼に微かな侮蔑が混ざった気がした。威三郎は戦慄した。今となれば、あさが希代の天才かつ猛獣だったことは理解している。だが、遙日は——まだ幼く、ただ一心に父を慕う愛らしさがある娘であつたはずだ。その娘が竹刀をだらんとぶら下げた姿勢で、ゆっくりと歩み寄つて来る。あさがあつた修羅の気はない。だが、人とは思えぬ冷たい気はさしきらずめ亡者のものである。威三郎は生理的恐怖から、渾身の突きを放つた。全日本の大会でも避けきれぬ者がいなかった威三郎の得意技だ。

決まると思つたその瞬間。遙日の姿は再びかき消えた。

今度は老剣士の大喝も無かつた。

(どこに行った?)

威三郎が周囲を見回そうとしたその時、後ろからポンと竹刀が軽く威三郎の頭を打つた。驚愕して、振り返ると完全に侮蔑の眼になった愛娘が威三郎を見上げていた。

「——なんだ。パパはお姉ちゃんを強くする為に、遙日から取つたんじゃないんだ。パパより強いから邪魔になつたんだ。だって、パパ。こんなに弱いもん」

言葉を失つた。あまりのことに威三郎はその場に腰を抜かして座り込んだ。

放心している威三郎を宮崎春雪の命で道場の隅へ弟子が引きずつて退場させる。

遙日はそんな父に興味を無くしたかのように、道場の真真中で、竹刀を肩に載せて、惚けたように天を見上げていた。

「春日野！」

「はい！」

宮崎春雪の呼び声に、今年度の全日本剣道大会の覇者が答えた。大阪府警の誇る強者である。

「あの童女と立ち会いなさい」

「はっ……」

答へはしたものの、春日野は戸惑っている。当然だ。遙日は興味の失せた視線を春日野に向けはしたが、相変わらず道場の真真中で惚けて立っている。竹刀は肩に担いだままだ。

「遙日ちゃん。試合です。構えなさい」

遙日は底冷えのする眼で春日野を上から下まで見る。構えない。

「——パパより強いね。お兄ちゃん。でも、だめだよ。お姉ちゃんに比べたら、相手にならなない」

春日野は怒つたりしなかつた。童女の言葉をそのままの重みで受け止めた。実を言えば、春日野は鳴神威三郎が鳴神あさぎに倒された時、激しい血の疼きを覚えていた。一人の剣道家として鳴神あさぎと立ち会いたいと切望した。老剣士・宮崎春雪は日本剣道界の重鎮にして未だ無敗を誇る尊敬する師である。その師が立ち会いを禁じた。だから、鳴神あさぎとは立ち会えなかつた。だが、この童女・鳴神遙日とは立ち会えと言われた。姉とは剣風がまるで違うが、

おそるべき使い手として春日野は認識している。故に試合を捨てた。春日野は鹿島一刀流と言う古武道を学んでから剣道へ転身した異端児である。彼はこの達人とは命を賭けた立ち会いで臨むしかないと瞬時にそう判断した。

春日野は試合剣道では意味がない八艘の構えを取った。右足を大きく後ろに退き、その右足に隠すように剣を後ろへ流す。大振りで畳みかけるように斬りつける、一発勝負の実戦の構えだ。その構えを見て。遙日の瞳に僅かに光りが点った。

「へえ。おねえちゃんの仲間だったんだ……」

「———どういう意味だい？」

愛くるしい童女はクスクスと笑う。

「お兄ちゃんは人じゃない。鬼だよ」

春日野は苦笑した。遙日の言葉の意味が良く分かる。そうだ。自分は常に人を斬ることだけを考えていた。竹刀剣道は自分を満たしてはくれなかった。遙日はずっと、竹刀の切っ先を春日野の喉元に向けた。姉譲りの凄惨な笑みを浮かべていた。春日野は同じ笑みが自分の顔に浮かんでいるのを意識した。剣道を始めて、ようやく血がたぎるのを感じた。

「構えてくれるのか？」

「うん。潰してあげる。お姉ちゃんを追い出したのを後悔させてあげるね」

「嬉しいな。子供相手とは思わない。鬼の本気、受け止めてもらうぞ」

「鬼の妹は、他の子鬼には負けないよ」

遙日の眼が青く輝く。春日野は全身の毛が逆立った。獣の咆哮を上げた。自分の腰にも届かぬ童女の頭に、怒濤の波の勢いで剣を振り下ろす。その瞬間、春日野は見た。小さな遙日の身の丈が半分に縮んだ。いや、しゃがんだのだ。そのまま弾丸の勢いで春日野の懐に飛び込む。懐に鬼が飛び込んだ。春日野の剣は外され、その腕の中に人形の様な遙日がすっぽりと収まる。感情の無い青い瞳が真下から春日野の眼を射る。

(殺られる！)

春日野は戦慄する。本能が死を告げている。この間、僅か0.2秒。他の門下生には春日野の打ち込みも見えていない。そして遙日は消えたとしか見えていないだろう。これで良い。春日野は死を覚悟した後、充足感を持ってそう思った。こういう立ち会いで死ねるならそれで良い。そう思っただけで瞑目した。

永い間があった。

死を伴う激しい衝撃はやって来ない。

(なんだ？)

春日野は眼を開けた。真下からあどけない瞳が揺蕩を含んで自分を見上げていた。幼子はそっと構えた竹刀を伸ばした。春日野の喉元をその竹刀の切っ先が優しく押さえた。

「はい。死んだ」

遙日は笑顔で言った。

春日野はその精神に激しい衝撃を受けた。童女の言葉を聞いた瞬間、体から力が抜けた。遙日は笑顔で言う。

「鬼じゃなかったね。お兄ちゃん。鬼は死ぬなんて思うことすらないんだよ」
では、この童女の姉・鳴神あさぎはどれほどの者なのだ？

春日野は戦慄して、そう思う。この童女が『鬼』と呼び、誰も適わないと公言する鳴神あさぎは、どんな境地にいると言うのだ？

「春日野。もう良い下がれ」

宮崎春雪が静かに言う。

「はっ」と答えて、春日野は、いや、道場の全員が目を剝いた。

生ける武神と言われた宮崎春雪が十年ぶりに竹刀を手にして立ち上がっていたのだ。

遙日は今までにない険しい表情で宮崎老を見据えていた。竹刀を持つ手にも力が入り小刻みに震えている。

宮崎春雪は静かに歩を進め、遙日の前へと進む。宮崎老の間合いになった時、遙日が叫んだ。

「なんで、おねえちゃんを追い出したの！ お爺ちゃんなら、おねえちゃんを止められたのに、なんで？」

「儂が？ 無理だ。敵わぬよ。遙日。君のお姉さんは人かね？」

その言葉に遙日は、はっと驚愕の表情を浮かべる。

「止める気はあったよ。家族が離ればなれになるほど辛いことはないからな。あさぎは、君のお姉さんは稽古相手がいなくなっても道場に来た。来るべきじゃなかった。父親を病院送りにした意味を考えるべきだった。あさぎは鏡の前で素振りをしていた。遙日、君はお姉さんが一人で素振りをしているように見えたかね？」

遙日は頭を振る。

「儂には相手は見えなかったが、あさぎは明らかに何者かと対峙し、それを切り倒していた。素振りではない。立ち会いをしていたんだ。相手が鬼神か自分の影か、儂には分からん。だが、その素振りを見て儂はあさぎが人でなくなったと判断した。遙日。君はなぜ姉に近づいた？なぜ教えを請うた？ 君はお姉さんを人に留めておきたかったんじゃないかね？ だが、あさぎは君に何かを注いだ。お父さんや春日野を倒したのは君の力ではない。鬼から注がれた力そのものではないのかな？ 良くない力だ。儂が今、抜き取って上げよう」

宮崎春雪は流れるように竹刀を正眼に構える。遙日も又隙のない動きで正眼に構えた。

門下生達は二人が向き合っただけで、体が強ばり、冷たい汗が背を流れるのを覚えた。そこにはこれまで見てきたどんな立ち会いにも無い、空気すら凍り付くような気が両者を包んでいたのだ。

(……どちらかが死ぬ)

遙日の父・威三郎を含めて道場に居た全ての者がそう感じた。それほどまでに二人の立ち会いの気の張り詰め方は凄まじかった。どこまでも静謐で激しかった。

「——お爺ちゃんが、あさぎお姉ちゃんを止められなかったのは分かったよ。十年遅かったって……」

十分ほどの微動だにしない立ち会いで遙日が呟いた。遙日の構えに気負いは無く、汗もかいていない。一方、宮崎春雪は目に見えて消耗している。

「——遙日。切っ先の先に儂が見えているかね？」

遙日は小さく頭を振る。

「青くて丸い光りしか見えない。わたしはその光りと共に動いているだけ」

春雪は鳴神あさぎと言う少女に改めて舌を巻いた。妹に与えた僅かな置き土産ですら、このような物だったのか！ ならば、あれはどれ程の剣気を身に纏っていると言うのだ？

「その光り。儂の切っ先に移すことは出来ないかね？」

遙日は一瞬黙った。

「ご老体。貴殿の定命は二ヶ月先で途絶えている。十年早ければ、貴殿と共にあるのも良かったがな」

口調が幼い少女のものではなかった。太く、そして相手の肝を握るような男の声であった。

宮崎春雪は苦笑を浮かべる。道場にいた者は皆、背筋が凍る思いをした。

「ならば、残りの命を賭けて消えてもらおう」

宮崎春雪の切っ先がひゅんと弧を描く様にしたかたと思うと、遙日の竹刀は巻き上げられて宙に浮いた。その竹刀の切っ先三寸に宮崎春雪は渾身の気合いで、自らの剣を叩き付けた。

遙日の竹刀は空中で砕け散った。と同時に遙日は糸が切れた人形のように崩れ落ちた。

「——遙日！」

「——遙日ちゃん！」

威三郎が、門下生が叫んで立ち上がる。春雪はよろめいた体を竹刀で支えて一喝した。

「騒ぐな！ 憑き物が落ちて気を失っただけだ。威三郎。寝室へ連れて行ってやれ。そなたの娘なのだからな。勿論、あさぎもそなたの娘だ。努々、忘れるでないぞ」

春雪はそう言うのと威三郎の肩を優しく叩いた。そしてそのまま昏倒した。

遙日は翌朝目覚めた。枕元に両親が並んで座っているのを不思議そうに見つめた。

「パパ。ママ。おはよう」

鳴神夫妻は顔を合わせ、同時に安堵を浮かべた。

「おはよう。遙日。気分はどうだい？」

「ふつうだよ。ママ、朝ご飯は？ 学校へ行かなきゃ」

「今日は休んだらどうなの？ あなた、昨日、道場で倒れたのよ。覚えていない？」

「覚えてるよ。大丈夫だから、学校くらい行かなきゃ」

遙日はそう言って微笑んだ。愛くるしい娘の姿に威三郎は相好を崩した。

「お母さん。ご飯を作ってくれるかな？」

母親の八千代は目尻を拭って台所へ向かった。それを見送ってから、遙日は幼い顔を父に向けた。

「パパ。遙日はもう道場には行かないね。もう、剣道はしないよ」

幼い口調ではあったが、その言葉には確固たる意志が籠もっていた。威三郎はこれを予感してはいた。だから、優しい口調で問うた。

「なぜだい？ 宮崎先生と立ち会って怖くなったのか？」

遙日は眼を伏せて哀しげに首を振る。

「遙日がお爺ちゃんを殺しちゃったからだよ。だけどね、お爺ちゃんが居なくなっても、あさぎお姉ちゃんがいるもの。お姉ちゃんは剣の世界を変えてしまっただって。だから、遙日は遙日の世界に行くの」

小学二年生の娘の言葉とは思えなかった。威三郎はぞわりとした。畏怖を覚えた。

「宮崎先生は生きておられるよ。遙日は夢を見たのかな？」

遙日はずっと天上を見上げた。

「駄目だよ。お爺ちゃん、もう、そこに居るもの。最後の言葉だって。パパ。『あさぎはお主の娘だ。愛してやれ』だって……」

威三郎は思わず息を飲んだ。その直後、階下に下りていた妻の八千代が慌てて階段を駆け上がり、宮崎春雪の訃報を伝えると号泣した。

四年の月日が流れた。あさぎは遙日とは頻繁に、両親には季節毎に手紙を交わしていた。だが、電話一本かけてこなかった。堪らずに母の八千代が柳生の里に電話を入れたが、娘との会話は叶わなかった。

まだ、その時期ではない。

柳生の里親はそう言った。八千代も若い頃は剣を鳴らした身だ。里親の言葉に畏怖が隠れているのを感じ取った。あさぎは天下の劍豪が集う柳生にあってなお、化け物として扱われている。そう感じて八千代は溢れる涙を止められなかった。「私の娘なのよ！」その声を上げて叫びたかった。実の母親である自分が、まだ子供のあさぎを抱いてやることすら許さない。それが剣の世界か！ 半ば呪いのような思いを抱かざる得なかった。なによりも家族から切り離されたあさぎが不憫でならなかった。盆・正月ですらあさぎは帰省を許されなかったのだ。身売りにした女郎以下の扱いではないか！ 八千代の中の憤慨と嘆きは血を吐くように激しいものだった。

八千代は自制心が強い。夫である威三郎にその感情をぶつける愚は犯さない。だが、威三郎とて愚物では決して無い。恩師・宮崎春雪の言葉も深く心に刻んでいる。一年目の正月に帰省が許されなかった際に、単身車を飛ばして柳生へ赴き直談判している。里親は威三郎の父としての思いを聞いて、ただ「お気の毒です……」吐息をついてそう答えた。威三郎はその言葉に激高し説明を求めた。里親は「仕方ない」そう言って威三郎を柳生の里の奥の竹林へ誘った。途中崖を登り竹林を高くから見下ろす場所に出た。

「ご覧なさい。そこに娘御がおられます」

里親の言葉を聞くまでもない。自分の娘を見間違える筈もない。崖下の竹藪の中に緋毛氈が敷かれ、鮮やかな振り袖を来たあさぎが小さく見えた。あさぎは緋毛氈の中央で野点をしている。上座には一人の豊饒とした老人。あさぎを取り巻くように屈強な男達が二十人。緋毛氈の上に座している。異様とも言える気がそこから立ち上っていた。そこにいるのが娘の姿をしていなかったら、威三郎は脱兎のごとくそこから逃げていただろう。

鬼などと言う生やさしいものではない。そこに居る者全員が鬼神の気をぎらぎらと放っていた。見れば、男達の腰には全員に真剣がある。中には中腰で剣の鏢に指をかけている者すらいる。男達全員の殺気が膨れ上がって娘のあさぎに向けられていた。まるで、僅かでも隙が出来れば全員であさぎをなますに斬り刻もうと言う雰囲気だった。

遠くから隠れ見るだけで震えが来ると言うのに、鬼神の剣気に取り囲まれているあさぎは平然としている。いつの間にも身に付けたのか？ 見事な所作で茶を点てる。まずは上座の老人に器を運ぶ。あさぎが頭を下げて茶器を老人の前に置く。老人の手が腰の剣に置かれる。背後の

男達も今、まさに斬りかからんとする。その時、威三郎は見た。遠くに見えたあさぎの体がみるみる大きくなり、眼前に迫った。

(死んだ)

威三郎はその時、そう思った。あさぎがではない。自分が死んだと思ったのだ。あさぎは身に剣など帯びてはいない。穏やかに微笑むあさぎの横顔を間近ではっきりと見ただけだ。それなのに、頭頂から尻の穴まで真つ二つに斬られる感触をまざまざと体感した。

それは一瞬の幻覚だったのかもしれない。

目を開ければ、可憐な振り袖姿のあさぎは遠く小さくあり、優雅な所作を崩さず次の茶器を配っている。だが、眼前に茶器を置かれた老人は歯を食いしばり、固まった体を動かそうと必死になっている。何人かの男達は一寸程剣を抜いた状態で金縛りに遭っていた。

「——柳生二十人衆」

里親は震える声で囁いた。

「あそこに居るのは、そう呼ばれる屈指の使い手です。表に出ることはありませんが、今、全日本大会に出しても軽々と優勝する器の者達です。上座におられるのが今の柳生流の師範に在らせられます。今を見られましたか？ 娘さんは柳生に來られたその夜、夜稽古で百人がかりをなされました。この深い森で、百人がかりで闇に乗じて娘さんを叩きのめそうとしたのです。得物は木刀。無論、防具はありません」

その尋常で無い内容に威三郎は目をむいた。娘は、あさぎは小学校五年生なのだ。少女なのだ。何と言うことをするのだと、無言で睨み付けた。

だが、里親は威三郎には目もくれず、崖下を見つめて畏怖を含んだ口調で言葉を紡ぐ。

「命じられたのは師範です。百人の中には、あの柳生二十人衆も混じっておりました」

「私は娘をいたぶってもらうために預けたではありません」

「鳴神さん。私は同じ言葉を貴方に返したい。宮崎八段は何を思っ、あの剣鬼を古流に預けようとしたのか？ ご存知ですか？ 鹿島一刀流の山田大悟先生は娘さんの写真を見ただけで、『ご勘弁願いたい。鹿島一刀流千年の歴史を当代で地に落とせません』そう言われたのですよ？ この話。他流にも瞬く間に伝わりました。我が柳生流の師範だけがお受けになられた。私は師範が優れていたが故に受けたと思っておりました。だが、今は師範の目は節穴ではなかったのかと思っております。あさぎさんの夜稽古ですが、空が白む頃にはけたたましいサインと共に、柳生街道にずらりと救急車が並びました。百人。柳生の手練れが百人。皆、一撃で倒されていたのです。一人残らず複雑骨折です。頭に一撃を受けた者には今も病院のベッドに寝ている者が数名います。——言うまいと思っておりましたが、言いましょ。でなければ、

貴方も納得出来なんでしょうから……。その、夜稽古で二人即死しています。頭を只の一撃で石榴のように割られていました。柳生の沽券は小学生の小娘に一夜で潰されたのです。二人の死を隠蔽するのは骨でしたよ。体力が尽きて動けなくなったあさぎ殿を、師範が木刀で袈裟斬

りにして、漸くあさぎ殿は動きを止めた。それでも気を失わなかった。鎖骨を折られたのに：。正直に申しますが、あさぎさんは龍虎、いや、阿修羅の類です。それ以後、あさぎさんに剣技の指導はしておりません。茶道や華道、舞を学んで頂いております。道場の見学は許されていますが、袋竹刀一本握ることも許していません。師範は我々に『隙あらば打ち殺して構わん』そう仰っています。同胞を殺された門下生には、本気であさぎさんを殺めんと、隙を伺う者もおります。しかし、見たでしょう？ 柳生二十人衆はおるか師範ですら、あさぎさんに打ち込めずに今に至ります。師範は『せめて気を抑える術を身につけるまでは剣の世界に入らせることは出来ぬ』そう申しておるのです。師範が申すには竹刀での立ち会いでも、あれは人を殺してしまう。柳生の活人剣の理を分かるまでは人里には下ろせぬ。とのこと。鳴神さん。今、あの娘御を里帰りさせれば、剣に飢えているあさぎさんは死体を作ってしまう。辛いのは分かりますが、堪えて下さい」

威三郎は身の震えを感じた。あさぎが人を殺めていると言うのもショックだったが、まだ女にもなっていない幼い娘が、龍虎・阿修羅の類だと天下の柳生流に言われたのが、なによりもショックであった。いつの間にか、あさぎは阿修羅神と化していたのだ。

「——あさぎは、あさぎは人に戻れますか？」

里親は眉を曇らせた。

「分かりません。ありとあらゆる努力をしています。だが、あのままなら——生涯を柳生の里で過ごすことも覚悟頂きたい」

威三郎は絶望に倒れそうになった。その時、一瞬だが、あさぎが威三郎を見た。

「——この距離で気づいたのか？」

そう驚く威三郎にあさぎは黙礼してから微笑んだ。たおやかな少女の微笑みだった。

「——望みはある。ああいう笑顔を浮かべるなら。親が娘を信じないでどうする！」

威三郎は自らをそう叱咤して何とか体に力を取り戻した。

「分かりました。改めて娘を頼みます」

そう言えただけでも、威三郎は自分を褒めてやりたい気分であった。

そして、あさぎの肉声を聞くことも叶わず四年の月日が流れた。思春期を迎える娘には、まさに、芋虫が蝶に変化する時期である。柳生から初めてあさぎ本人から鳴神家に電話があったのは、まもなく春を迎えようとする季節であった。

最初に電話を取った八千代は受話器を落とすほどに動揺した。自分の知っている子供の声のあさぎではない。軽やかに弾む、華を含んだ若い娘の声であった。柳生では一切剣技をさせられなかった為なのか？ 武道家の低い声ではない。電話口からもひまわりを思わせる突き抜けて明るい魅力のある声だった。

あさぎは中学を卒業したので、帰省して地元の高校へ行くと言う。柳生のお墨付きで、特待

生として地元でも名門の女学校へ行くと言う。その高校は学問のレベルも高い。幼稚園からの一貫教育で高学力と礼儀作法まで叩き込む教育方針で、幼稚園の入学の際には両親への面接である。富裕な名門の子女が集まる学校だ。編入はこれまで例が殆ど無い。故に特待生でも全国模試でトップクラスの学力を求められる名門だ。しかし、柳生で学問も叩き込まれたのか、あさぎは国立進学コースでも通用する成績で入学を決めていた。

鳴神家は浮き足だった。

四年間も引き離された娘が帰って来るのだから、無理もない。幸いあさぎの部屋は八千代が毎日手入れをしていたので、受け入れるのに家の模様替えなどしなくても良かったが、親にしてみれば、見知らぬ思春期の娘を招くに等しい。送られて来ている写真では、楚々として美しい娘にあさぎは変貌している。また、柳生でのあさぎを知る威三郎にすれば、あさぎが人に戻っているのかと言う大きな不安がある。

遙日だけが落ち着いていた。来年中生になる遙日はすでに町内一の美少女として名を馳せている。遙日が神秘的な百合だとすれば、写真のあさぎは向日葵のような明るい娘の筈である。少なくとも送られて来る写真のあさぎは、華やかな美しさで常に笑って写っていた。それが嬉しかったのだろう。自慢げに八千代がそれを口にする時、遙日は冷ややかに言った。

「そう思っていたら、しっぺ返しが来るよ。そうだね。花に例えるなら……」

遙日はしばし考え込んでから言った。

「お姉ちゃんは曼珠沙華だよ」

その意味する所は八千代には分からなかったが、微かに不吉を覚えた。曼珠沙華には死の香りがするように思えた。

あさぎと頻繁に手紙をやり取りしていた遙日は、父・威三郎にも不吉な釘を刺した。

「お父さん。柳生から帰ったからと言って、お姉ちゃんが自分から道場に出ない限り、お姉ちゃんの剣を見ちゃ駄目だからね。特にお父さんは絶対立ち会わないで！」

いささか惘然として威三郎は何故かと尋ねた。威三郎とて無為に時を過ごしていない。あさぎの人を凌駕した闘気を知ってからは、現役時代を上回る修練を積んできたのだ。

遙日の答えは明瞭だった。

「ウチは道場の収入でご飯を食べているんだよ。大黒柱のお父さんが隠居したら困るじゃない！」

柳生の里であさぎが何をしたのかは、誰もが口をつぐんでいる。遙日がそれを知るはずもない。だが、それを知る威三郎には遙日の言葉は五寸釘のように心に刺さった。威三郎はただ黙するしかなかった。頻繁なメールのやり取りからあさぎの実体を一番理解しているのは遙日しかない。それに遙日には先見をするような天性の感がある。人の器や品性を見抜く鋭さは老成した禅僧を思わすほどだ。人を見る目に関しては、威三郎はまだ子供と言える遙日に一目置いている。

再開の日が来た。

威三郎は羽織袴。八千代は高級品の留め袖を借りて身繕いを整えた。柳生の里は少なくとも衣食住に関しては、あさぎに最上級の物を与えていた。写真のあさぎは値が想像も付かないような振り袖や簪で身を飾っていた。柳生の里で与えた物は全て鳴神家に送ると言われている。威三郎や八千代の元にはお節介な忠告も届いている。その者は訳知り顔であさぎの身の回りの品は全て国宝級に近い物ばかりだと言った。

「娘さんが帰って来るなどと思っただけじゃありません。茶道でも華道でも超一流の振る舞いで、高貴なお方のお相手を務めておられました。柳生の姫君をお迎えするお積もりでいなければなりませんぞ」

元公家の家のお出で、茶道の大家と知られる人物がわざわざ忠告に来たのには経緯がある。その人物は剣のことは何も知らなかったようだ。剣道家である威三郎にあさぎの剣の話は一切しなかった。そう言う配慮が出来る人物ではないので、あさぎが剣を振るうこともまるで知らないだろう。あの娘御なら華道も茶道も家元に匹敵する。そう言っただけで去った。

あさぎは柳生で遂に剣を触らずに育ったのか？

威三郎は腕を組み考える。だが、それでは剣道で特待生として高校入学するのは腑に落ちぬ話である。玄関先で見送ったまま座り込む威三郎の元へ八千代と遙日が見送りから戻って来た。

「お母さん！ 塩！」

珍しく遙日が柳眉を逆立てていた。威三郎は静かに顔を上げ、娘を見つめる。母から粗塩の袋を受け取った遙日は「なんて俗物！」と言い捨てて玄関に塩を撒いた。

「おい。遙日」

諫めようと口を開きかけた威三郎に、遙日は喰ってかかった。

「あんな人と付き合うのは止めてよね！ お父さん！ ああ、反吐が出るわ。見栄と自尊心だけで出来た最低の人間。お父さん、誑かされないでよ！ 私のお姉ちゃんだから、お父さんの娘なんだから、普通に受け入れたら良いのよ！ 私たちにはそういう義務がある！ 違つかしら？ お父さん？ お母さん？」

遙日の龍の様な激しい怒りに、母の八千代は気圧されている。『世の中には付き合いと言うものがある』そう言うつもりだった威三郎は言葉を飲み込みざるを得なかった。義務と言う遙日の言葉が威三郎の胸を突いたのだ。そうだ。その義務の前に建前などは捨てねばならない。

「遙日の言う通りだ。あさぎを出迎える時は精一杯の歓待をしよう」

どっしりとした父の言葉に遙日は漸く相好を崩した。

（――で、精一杯の歓待をするのに、一着百万円近い貸衣装を借りる訳？）

遙日は鼻白んだ眼で、あさぎの到着三十分前から玄関で正座している両親を見る。まあ、剣

の世界で柳生は名門中の名門だ。そこに援助をすることもなく、四年間、娘を預かって貰った恩義を表すには、この人たちはこうするしかないのだろうと遙日は思う。けれど、それって恩義なの？ 四年間、週に二度は交わした姉の手紙には、悲しみや寂しさが書かれることは一切なかった。通っていた中学校の級友の名前を笑い話で書くことはあっても、柳生の里の生活はおろか、里親の名前すら一文字も姉は書いていない。それだけで遙日は柳生を恨むに足りる。あさぎの手紙は漫談のようで楽しいことしか書かれていなかった。ただ、柳生の里の森の神韻渺々たる気については贅辞が長く記されていた。その森には柳生石船齋が木刀で一刀両断した巨石があると言う。姉のあさぎはそれを見ると楽しくて仕方が無いと書いていた。逆に言えば、あさぎにとつて柳生での生活では他に見るべきことも学ぶこともなかったのだろう。そう思うと遙日は泣きそうになる。一番多感な思春期の娘がセンチメンタルにふけることも出来なかった生活。それを強いた柳生の里や父、しいては『剣』と言うものを遙日は憎悪する。遙日は理解している。姉のあさぎは悲しんだりはしていない。何があったのかは分からないが、後半の二年間は明るく笑って過ごしている。だが、それは『剣』の世界にどっぷり浸った上での笑いだ。常に抜き身の白刃の上において呵々大笑するに至ったのが姉のあさぎだ。だが、今の世の人に姉をそこまで導ける者が存在する筈が無い。一体、何者が姉を変えたのか？ それを想像すると遙日は全身が総毛立つ。

武道で鬼と呼ばれる境地に達した者は、それが写真でも、そしてどんなに抑えても、人を据え物のように殺める鬼気が漏れる。遙日はそれを見抜く目を持っている。

ここ数年のあさぎの写真に、その鬼気は写っていない。

だが、物心ついた時のあさぎは、すでに常軌を逸した鬼気をその内に孕んでいた。別れを惜しみ、只一人、剣を交えた遙日はその恐怖を体に刻まれている。姉から受け継いだ僅かな鬼気でさえ、不敗の剣豪の定命を奪う代物だった。故にあさぎ一人が姉の屈託のない笑顔の写真に恐怖していた。

姉のあさぎは笑いながら鬼神の域に達した者の鬨気を、その根っこから切り捨てる域に達している。おそらくは遙日のみがそれに気づいている。だから遙日は姉を称して『曼珠沙華』と称した。

遙日は純粹に姉との再会を心待ちにする一方で、想像の域を超えた姉の立ち位置に未曾有の恐怖を覚えると言う矛盾した心持ちでいた。その矛盾を内包した遙日の姿は、冷めた氷のように周囲には見えた、やや血の気の失せた横顔は、少女にあるまじき美しい憂いを帯び、語りかけるのも躊躇われるものであった。

鳴神家の前に車が停まる音がした。

鳴神夫妻は緊張と喜びの混じった表情を浮かべた。音からして高級乗用車が一台。引越しのトラックが二台来たことが知れた。鳴神家の者は音だけでその程度は察知出来る。母の八千

代と遙日が外に出迎える手筈だった。

八千代は目線を遙日に送り、驚愕した。

両親の後で正座していた遙日は立ち上がり、後ずさって壁に崩れる体を預けていた。血の気は完全に消えて失神寸前の有様だ。うわごとを繰り返している。

「これはなに？　こんな気知らない。なにが来たのよ？」

八千代は何か言おうとして、言葉を飲んだ。遙日の最近の奇行は心得ている。今はたしなめる時間は無い。八千代は一人、門から出た。

芸術品と言える振り袖に身を包んだ四年ぶりに見る娘が、観音開きのリムジンから、手を取られて車からしゃなりと下りる所だった。あさぎの手を取っていた運転手と助手席を下りた里親、そして明るさを惜しげもなく放つあさぎが、八千代に向かい、礼儀正しくお辞儀をする。

八千代は駆け寄ってあさぎを抱き締めたい衝動を必死で抑え、動揺しながらも、深々と頭を下げた。まるで姫君のような所作で、運転手に誘われ、あさぎは鳴神家の玄関に入った。

誰もが緊張し、四年の歳月の重みを噛み締めて、礼を交わそうとしたその瞬間。

あさぎはこれまでの貴人の様な所作はどこに行ったのか？　右手を高々と上げて元気良く振り回し、それこそ底抜けの明るさで声を張り上げた。

「ヤッホー！　ただいまあー！　みんな元気してたあー！」

日本人らしい湿っぽく、儀式めいた再会を、あさぎは第一声でひっくり返した。四年の歳月の重みなど微塵もない。まるで小旅行から帰ったような無邪気な明るさに、誰もが毒気を抜かれ、ただ啞然とした。

只一人、遙日だけが腰を抜かして床にしゃがみ込み、白昼に龍を見たかのような表情で、畏怖をもってあさぎを見つめていた。

あさぎの帰還から、瞬く間に八年の歳月が流れた。八千代は目を細めて美しく成長した娘を見つめる。

朝の食卓。威三郎と八千代、あさぎがテーブルを囲んでいる。あさぎはテレビを見ながらコロコロと笑い、良く喋る。遙日はここのヶ月この食卓には不在でいる。婚約者の日本画家の個展が近い為、泊まり込みで手伝いをしているのだ。中学の頃から放浪癖がある奇妙な娘に遙日は育ってしまった。威三郎としては厳しく叱りつけたのだが、底の見えない透き通った目で見据えられると何も言えなくなるのだ。過去を思えば無理も無い。代わりと言うのもなんだが、あさぎは柳生から戻ってからは家事を一切請け負っている。あさぎは陽の出前には起床し、ラニンングと素振りを欠かさない。そして朝餉の支度を終えたところに八千代は目覚める。当初は八千代も頑張って早起きをしたが、とても続くものでは無かった。あさぎはそんな八千代に朗らかに笑いかけて言った。

「いいのよ。お母さん。今まで心配かけたのだから。わたしにやらせてよ。娘からの恩返し。受け取って頂戴」

八千代はその言葉に感涙した。一つ間違えば父殺しに至ることをしたとは言え、威三郎と八千代はあさぎを放逐したに等しい。恨まれて当然なのに、あさぎは心配をかけたから親孝行をすると本心から言う。親としてこれほどの喜びは無い。あさぎは料理の腕も板前が勤まるほどのものだった。柳生ではこんなことばかり教えられたとあさぎは笑う。剣を握ったのは最初と最後の日だけだと言う。

あさぎが嘘をつく理由はどこにも無い。

しかし、八千代も威三郎もそのことには首を傾げざる得ない。

あさぎが帰還した時、柳生の里親は蒼白な震える顔色で、一つの巻物と筒に入った書状を二本、威三郎に掲げ捧げる仕草で渡した。渡し終えると早々にリムジンで去って行った。威三郎はそれをいったん神棚に置くと、次々と運び入れられるとんでも無い代物の応対に八千代と共に忙殺されたのだ。どう見ても国宝クラスの漆塗りの衣装箆筒や刀箆筒が運び込まれる。数百年は経過しているであろうそれらの品は色褪せることもなく、くたびれもない。漆は何重で塗られているのか想像も出来ない。その中身も二人の度肝を抜いた。衣装は恐らく柳生歴代の姫君の残したものだ。現代の技術ではもう作れないそれらの品は、どれほどの価値があるのか想像すら適わない。

威三郎に解るのは刀箆筒の中身くらいだ。

三段の棚の一番上を検めると紫の絹袋に入れられた一振りがまず目に飛び込んだ。威三郎も

八千代も息を飲んだ。袋越しでもご神体のような清廉な気が感じられた。威三郎は魅入られて、知らずにその袋を解いた。黒塗りの鞘に真珠貝で獅子の文様がある。鏝には所々、金銀で唐草文様が彫り込まれ、まるで新品の様に輝きを放っているが、それは毎日誰かが手入れをしているからであることは見て取れる。新作の日本刀にありがちな浮ついた所がない。やや細身のその刀の造作は計算しつくされた様に調和して、一種の神気がある。刀箆筈には他にも只ならぬ気を放つ物ばかりが収められていたが、その中でもこの一本は格が違った。柄に純金の菊の紋が刻まれているのを見た時は、威三郎は血の気が失せる思いがした。

荷物の運び込みを一時、中断してもらい、威三郎は仏間に入り、八千代に一枚の和紙を持って来させ、和紙を半分折り、口にくわえると、ゆっくりと抜刀した。仏間の一番後ろで八千代は正座して、緊張の面持ちでじつと見つめて来る。

一寸程抜いたところで、威三郎は危うく口に咥えた和紙を落としそうになった。純度の高い玉鋼を名工が鍛えることで生まれる奇跡の様な黒光りが、刀身を龍がうねるような美しさと覆っている。波紋は乱れ玉文様で芸術品の域にある。プラチナのような輝きは決して派手ではない。細い刀身から立ち上がる気は、最早、日本刀とは言えない。それ自体が神の化身であるかのような神々しさがあった。

後ろに正座で控えていた八千代が「——ひっ」と息を飲み姿勢を崩したのを、威三郎は察した。自身も身の内が震える動揺を必死で抑えた。あさが柳生に行つてから厳しい修練を己に課していなければ、無様に刀を落としていたかもしれない。威三郎は呼吸を忘れ、静かに畏怖と畏敬を持って刀を鞘に収め、仏壇の前に置くと大きく息を吸った。

——菊一文字。

平安末期の古刀の中でも、最も完成され気品を放つことから天皇より菊の一字を冠することを許された国宝の中でも最上級の位置に在る名刀中の名刀である。切れ味も日本刀の中で最高級と言われるが、これを手にして血に染めるような者は、それを持つ資格は無い。

威三郎は身体の芯が冷えて震える思いであった。

威三郎は、あさが柳生に引き取られてから、伝手を頼り週に一度天然理心流を学んで来た。最初は竹刀剣道とはあまりに異質な剣筋に度肝を抜かれた。まず剣の握りが違う。竹刀剣道のように手首を使う握りではない。力の限りに柄を握りしめ、一振りに渾身の力を籠める。竹刀剣道で教えられる様に切つ先三寸で斬るのではない。剣の腹で力業で相手を斬り伏せるのだ。荒々しさも並ではない。立ち会いの間合いが近いから、技が決まらなかった時は合い並ぶ形になる。だから相手を蹴り倒して間合いを作り、倒れた相手を叩きのめすは当たり前だ。こんな真似を竹刀剣道でやれば、剣道界から放逐されてしまう。

そう言う太刀筋だから、竹刀剣道の基本として学ぶ、小手・面・胴の三連続技などは神業に思える。一振りに全力を籠めるから、連続技は出ないし、大抵は二振りもすれば雌雄が決する。

二振りでも平然と避けられる達人が居なければ、三連続技など出せない。

が、沖田と言えば三段突きで有名だ。天然理心流の太刀筋からすれば不可能な太刀捌きである。正に神業だが、それを繰り出せる相手が居なければそんな技は体得出来ない。当時の試衛館に塾居し、新撰組結成時に各隊の隊長を務めた者達は、沖田の神業に出来る事が出来た化け物が揃っていたのだろう。

威三郎は剣を鞘に収めて、太く息をついた。

柳生の使いは、あさが三段突きを修得している。そう言った。

が、あさは柳生で剣を握ることを許されたのは、初日と柳生を去る僅か前の二回だけだと明言している。嘘をつく娘ではない。では、誰を相手にあさは三段突きを体得したと言うのだ？ そう考えた時、威三郎は背筋が総毛立つのを覚えた。そして柳生は菊一文字の担い手に相応しいとあさを認めたことになる。

引越し業者が去り、一段落ついたところで、威三郎は気づいた。肝心のあさがいない。妹の遙日の姿もない。喩えようのない焦燥感が威三郎を襲った。

「おい！ あさと遙日はどこだ？」

妻の八千代は小首を傾げる。

「あさぎなら、道場を見にくると半時前に出て行きましたよ。遙日は最初から姿を見てません。なぜか怯えていたようだから、部屋に籠もっているのじゃないかしら？」

威三郎は一瞬で全身に水を被ったように、冷たい汗をかいた。

あの姉妹は尋常の者ではないのだ。

威三郎は全力で道場へ駆けた。

予感的中していた。人外と表現して過言でない姉妹は道場で対峙していた。ただ、剣を取って対峙していたのではない。あさは上座で正座で瞑目している。遙日は結跏趺坐で下座でやはり瞑目している。

それだけだ。

それだけなのに、道場の空気は突然氷河期が来たかのように冷えて、身じろぎを許さない厳しい気で満ちていた。

威三郎はその気に飲まれ、言葉を一瞬失った。が、親としての本能が娘の命の危機を教えた。威三郎は甲高い声で叫んでいた。

「遙日！ 引け！」

その声に応じたのは、遙日ではなく、あさぎだった。あさは威三郎が母屋を飛び出した時から父に気づいていたのだろう。

「あら？ お父さん？ どうしたの？」

邪気の無い明るい笑顔を浮かべ、すつと気を引く。とたんに道場は春の陽気に包まれた。そ

の瞬間、遙日はどうと倒れた。声にならない悲鳴を上げて、威三郎は遙日を抱き上げる。なぜか死んだと思ったが、遙日の豊かな胸は微かに上下している。失神していたのだ。

あさぎはそんな二人を見つめて「あら？ はるちゃん。いたんだ？」そう言った。まるで動じていない。何をした？ 威三郎はそう問い詰めたかったが、一切の邪気も殺気も無く微笑むあさぎに言いしれぬ恐怖を覚え、喉が痛む程に乾くのみだった。あさぎは微笑んだまま近づいて来る。威三郎は地獄の徒卒が自分を引き連れに来る様に感じ、脱糞しかねない恐怖に身じろぎが出来なかった。あさぎは威三郎の腕から軽々と遙日の身体を抜き取ると喝を入れた。小さく身じろぎして遙日は目を開ける。あさぎは慈愛に満ちた顔で言った。

「悪戯は良くないよ。遙日」

遙日はバネ仕掛けの人形のように飛び下がり、あさぎに対して平伏した。

「申し訳ありません！」

凜とした声でそう言った。あさぎはやや皮肉が混じった笑顔で応じると、無言で妹と父を残して道場を去った。その姿が完全に消えても、遙日は平服の姿勢を崩さず、威三郎は恐怖をぬぐえずにいた。

「何をされた？」威三郎の問いに遙日は首を振るばかりだった。「お姉さんの瞑想に割って入っただけです」。威三郎はその言葉を信じた。同時にあさぎが瞑想するだけで、常人なら命を失いかねない気が放たれることを悟った。

天然理心流では気位で相手の戦意を奪い、据え物斬りにするのが一つの境地だ。威三郎が師事する師範はその境地に近いところにいる。だが、その論理で行くとあさぎはただ瞑目するだけで、剣技を交わすまでも無く、対峙する相手の精神を凍て殺してしまう境地にいる。相当の実力者でもあさぎと対峙した瞬間、肝を抜かれてその場にへたり込むだろう。

あさぎと剣を交わせる相手がいるのか？ 威三郎はあらゆる流派の鬼神のような使い手を思い浮かべた。

—— いない。皆無だ。

威三郎は全身が小刻みに震えた。恩師・宮崎春雪は「二天様（宮本武蔵）ほどの方で無ければ、あさぎを指導出来ない」と言った。数百年に一度現れるか否かの希代の天才にして、羅刹そのものの化身のような存在でなければ、あさぎの指導は無理と言ったのだ。この現代にそんな存在はいない。剣道はスポーツ化している。武蔵のように一勝負一勝負に命を賭ける剣術を教える流派は無い。

あさぎを預かった柳生は、場合によれば、生涯を終えるまで、あさぎを幽閉することもあり得ると言った。それは並み居る剣豪が集う柳生でも、あさぎを教え導く存在が居なかったことを意味する。事実、あさぎは柳生に赴いたその夜と、柳生を発つ前に、師範代ではなく柳生の宗家の前で形を披露しただけだと言う。

では、あさぎは何から最早神仏に近い気を体得したのか？ 柳生はなぜ、あさぎの幽閉を解き、帰したのか？

威三郎は母屋に戻ると、神棚に置いた柳生の書面を畏怖と御神託を待つ気分でゆつくりと広げた。威三郎の頭は真っ白になった。

一つは鳴神あさぎへの柳生流の免許皆伝書であった。しかも師範代によるものではない。柳生の現当主直筆によるものだ。日本剣道史上、齢十五歳で免許皆伝を得た者は居ない。しかも屈強な若者ではなく、一見すると花のような少女である。その異例さもさることながら、柳生の当主直筆の免許皆伝書は、師範代のそれとは意味合いが違う。師範代ですら知らぬ奥義が柳生流にはあると言う。当主直筆の免許皆伝書。それはあさぎが柳生流そのものを引き継いだことを意味する。事実上、柳生の当主そのものになったに等しい。このような免許皆伝書は、当主から次代の当主に相応しい親族に受け継がられて来た。柳生の血を受けていない、あさぎがそれを得たと言うのは天地が引つ繰りかえるほどの出来事で、柳生の剣の頂点に立ち、その責務を負うことを意味する。おそらく柳生では相当の騒動になっただろう。

もう一通の書面を開いた時、威三郎は畏怖に打ち震えた。白鷗神社の野試合に柳生を代表して出よと当主の文字で記されていたのだ。

白鷗神社の野試合。

古流を学ぶ武闘家の間では著名である。毎年、その野試合の勝者の名は古流を学ぶ者の間に武神の化身として流布する。しかし、その試合の内容は誰も知らない。古くは鎌倉時代まで遡る試合だが、出場者は試合の内容の口外を堅く禁じられている為、概要を知る者は皆無と言える。誰もが出場出来るものでもない。どうやって知るのか？ 白鷗神社の神主から数多の古流より『天才』と称されるような傑物が僅かに選ばれる。白鷗神社はN県の山深くにぼつねんと存在する大きな社だ。延喜式にも記されている古式ゆかしい神社である。山の頂上に近い丘に建立されている。その山そのものがご神体で禁足地だ。神社へ至る石畳の長大な階段以外へ入れることは許されていない。階段を登るだけで、山登りに長けた者でも息を切らす。お社にたどり着いた参拝者は、その荘厳な朱塗りの社に息を飲む。このような場所にどうやって建立したのか理解出来ない立派な社で、日本武尊を祀る。本殿は国宝である。武道の守護がご利益である。

この神社の野試合は、指定された日の十二時までには本殿の記帳所におかれた特別のお札に名を記した者が勝者とされる。勝者以外は姿を現さない。歴代勝者の名が記されたお札は本殿内に飾られているが、特別に許された者以外は見る事が出来ない。近在の者が野試合の日には早朝から本殿の前に集まりその勝者を記録している。勝者は剣豪とは限らない。無名の流派の空手家が勝者であったこともある。得物にはこだわらない異種格闘技なのだ。当然、真剣も許される。選ばれた勇者がどこでどのような戦いをしたのかは分からない。勝者以外は衆目に姿を現さないからだ。敗者の中には、遂に姿を現さず行方不明扱いされた者もいる。ある者は禁

足地の川辺で頭部を石榴のように無残に割られた骸として発見されたりする。事実上、勝者以外は無事に山を下りたことがない。そういう試合である。

柳生流は毎度招請を受けているらしいが、歴史上それに応じたのは柳生十兵衛のみとされている。柳生ほどの名だたる古流でも勝者となる者として白鷗神社へ送れたのは十兵衛しかいなかったのだ。柳生十兵衛以来、漸く柳生が送り出したのが、鳴神あさぎということになる。

威三郎が蒼白になるのは当然だ。ただ一人の勝者にならねば生きて帰ることがない試合に、柳生は娘を送り出せと言って来たのだ。威三郎は妻にあさぎを呼びに行かせた。書齋にピンクのジャージ姿で現れたあさぎは、免許皆伝書にも白鷗神社の野試合の参加についても、まるで他人事のように表情も変えずに聞いた。威三郎が「白鷗神社の野試合がどんなものか分かって居るのか？」と問いただと、ふっと笑って頷いた。それで威三郎はあさぎが化け物のまま帰って来たかと悟った。

「試合は何時ですか？」あさぎは飯時を聞くような気軽さで尋ねた。

「明後日だ」威三郎がそう答えると、「承りました」あさぎはそう答えて、威三郎に礼をするのと部屋を出て行った。言葉をかけたかったが、威三郎はあさぎの体から滲む闘気に気圧されて身動きも出来なかった。その夜、家人も気づかぬ内にあさぎは鳴神の家から姿を消した。遙日の携帯に「明後日の昼に帰るから心配しないでね」と言うメールが残っていた。

あさぎの不在に翌朝、家人が気づき鳴神家の空気が乱れた頃、鳴神家のインターホンを鳴らす者がいた。客人とは思えない。来訪するには常識外れの時間である。その者の異様な気にも早く気づいたのは遙日だった。双眸を青白く輝かせ、魔と対した退魔師の顔つきで玄関を覗み据えて、インターホンに答えた。

「——どちら様でしょうか？」

その声は氷のように冷たく澄んでいた。低い男の声が微かにインターホンから、威三郎の耳にも届いた。それは野生の猛獣が低く唸ると同質の響きだった。遙日は氷の表情で父・威三郎を見据えた。

「——春日野さんよ。お父さん」

春日野健司。かつて鳴神道場で剣を奮い、宮崎春雪没後、その唯一の後継者と言われながら、日本剣道界から退き、鹿島一刀流に戻った男だ。

威三郎は玄関を開けた。門前に立つ背の高い男は、正に荒野に生きる猛獣を思わせた。手入れもしていない髪は、無造作に短刀で切っているのだろう。乱れに任せて肩口まである。臭わないから、水をかぶる位はしているのだろう。作務衣に身の丈よりやや長い、使い込んだ黒光りする棒を立てるように持っている。作務衣もついさつき山籠もりから下りてきましたと言わんばかりに綻び、汚れが染みとなり全体に滲んでいるが、洗濯はしているだろう。浮浪者のような臭いはしない。筋肉が二回りは大きく体を包んでいるが、自然に引き締まっているので、

見た目は以前、道場に通っていた頃と変わりなく見える。が、全身から野獣の精気を放ち、半眼の眼から漏れる視線は人を射殺す鋭さがあり、威三郎はそれが、かつての春日野とは一瞬分からなかった。声も喉が潰されたのか、低くかすれたものに変わっており別人のものだ。遙日がインターホン越しに春日野と判断したのは不思議としか言えない。

「——春日野君なのか？」確認せずにはいられない威三郎の問いに即答せず、春日野はゆっくりと鳴神家の中を眺め回すと言った。

「あさぎさんを迎えに来たのですが、一足遅かったようすな」

「あさぎは夜の内に姿を消した。迎えに来たとは、どういう意味かね？」

春日野はそこで相好を崩した。

「——流石だ。野試合と言うものを心得ている」

険しくなった威三郎の顔に獅子が口を開けるように笑いかけると、春日野は言った。

「私は去年の白鷗神社の野試合の勝者です」

鳴神夫婦は春日野を家に招き入れようとしたが、春日野は玄関口から向こうへは頑として行かない。仕方なく玄関口で茶を出すと、春日野は器を手にして、まず香りを嗅ぎ、幸せそうな表情になる。そして僅かに口に茶を含むと「ああ、甘露だ」と嬉しげに言った。「安物ですよ」八千代が言うと、「この一年、泥水を啜って生きてきたもので……」と春日野は応じた。山を下りたばかりの熊のような見立て間違いではないらしい。

「今年も、私は野試合に招致されています。あさぎさんも柳生の看板を背負って出られると聞きましたので、先達を努めようと思いましたが、一枚上手でした。姿を見られないようにされるとはね。立ち会いを心得ておられる」

「あさぎが出るとどこから聞いたのかな？」

「人の口に戸は立てられません。ましてや柳生の鬼百合、柳生の鬼神と言われたあさぎさんだ。柳生十兵衛以上の傑物との噂はもう古流では広まっています——」

そう言うと、春日野はすつと目を細めた。

「どうやら、化生の輩が来ていますな」

「三匹。でも子鬼だわ」

意味の分からぬ春日野の台詞に即座に応じたのは遙日だった。

「剣を捨てたとは思えないね。遙日ちゃん」

「別に心胆を練るのを止めた訳じゃないわ」

年上の者への礼を欠いた言葉に、威三郎は含み笑いをする。

「あさぎさんは、今回の参加者全員が最大目標にしています。まあ、立ち会いになるのは私を含めて片手もないでしょうが……」

「どういう意味かね？」

「今、ここを伺っているような輩では、出会った瞬間に絶命すると言っています」

威三郎はその言葉の示す凄絶さにしばし口をつぐむ。遙日だけが氷の表情を崩さず春日野を睨み据えている。睨みながら言う。

「春日野さん。事前に慰問に来たおつもり？ 思い上がりも良いところよ。貴方は鬼になったようだけど、姉は武神の域にいる。せめて楽に逝けるようお祈り申し上げますわ」

「———そうかい？」

春日野は立ち上がっていた。

「立ち会いに無敵はないよ。野試合に招かれるのは生来の才能と強運を持った輩だ。地の利、天の利、時の利、それが一瞬の勝敗を分けるのだよ。昨年、僕はそれを身に浸みて知っている」

「姉は貴方たちの枠で計らない方が良いと忠告してあげるわ。天の利、地の利、時の利。姉はそれすら我が物として扱える。考えて見ると良いわ。姉は柳生で何者を相手にその心胆を練ったのか。山谷に籠もった貴方なら人知を超えた体験が分かるでしょう？ 姉と貴方たちでは相手にした者の格が違うのよ。さようなら。春日野さん。良い後生を祈ってあげる」

威三郎と八千代は娘のあまりの暴言に度肝を抜かれた。遙日はやや毒舌の傾向はあったが、本来、寡黙で他人を傷つける言葉は避ける娘であった。それが、あるうことか死の宣告をしたのだ。それも姉のあさぎに殺されると断言したのだ。身内が人を殺すなどと普通は言えない。受け入れられないのが普通だ。だが、遙日は姉が死をもたらすと胸を張り宣言した。

春日野は暫し黙した。それは遙日の言葉を額面通りに受け取った沈黙だった。春日野は静かに立ち上がると、鳴神夫妻に黙礼した。

「お世話になりました」低い猛獣の声で言う。そして遙日に目を向ける。「君は剣を捨てて正解だったね。でなければ姉妹で命のやり取りをしただろう」

遙日は氷のように冷たい声を崩さない。

「剣は手段よ。道を究めようとする者は必ず立ち会う。姉さんは私を相手にもしなかった。ただ、瞑目するだけで、気を放った私を無意識に組み伏せ氣息を奪った。あさぎ姉さんはそれすら意識していなかった。姉さんが纏う気が自然にそう動く。それが貴方の相手です」

春日野は答えなかった。黙礼すると鳴神家を出た。慌てて後を八千代が追ったが、そのときには春日野の姿は影も形も無かった。

白鷗神社のある山は綺麗な円錐形をしていて、周りの山脈からは離れて独立して見える。約二千年に渡る厳しい禁則の掟は、それ自体がご神木であるような数千年の樹齢の大木が蔓延る異界を形成している。山頂付近には巨大な磐坐が林立する異様なものだが、それを知るのは野試合に出た者だけだ。中腹に滝があり、そこから清流が流れる。春日野健司は隣町で電車から降りると、獣道を選んで山奥に入った。山奥と言っても日本の山林は殆ど人の手が入って植樹されている。だから、少し鍛えればその山中を行き来するのは難しいものではない。春日野はある程度山奥に入ると、大木を探す。目当ての大木を見つけると、するすると登って、太い枝に寝転がる。すぐに眠りに落ちたが、半時程すると人の声がしたので、半覚醒の状態で薄目を開けた。肉体はまだ眠っており微動だにしない。

「いたか？」

「いや、見あたらない。確かにこちらへ来たのだが……」

春日野は緩慢な動作で顔を下を向ける。日本刀を持った男が二人騒いでいる。少し離れて長槍を手にした壮年の男が静かに佇んでいる。髪が長く腰まであり、眼光は鷹のようだ。

「——ほう。出来るな。あの得物と外見。槍術の長瀬水樹か……」

「——声を上げるな。禁足地に入ればどの道出会う。先へ行くぞ」

「長瀬さん、大した自信だが、春日野と柳生の鬼百合は倒せる時に倒すに超したことはない。たとえ三人掛かりでも」

長瀬はあからさまな軽愚の目で二人を見る。

「ならば貴公らは搜索を続けるが良い。私はその二人とは正面からやり合うつもりでいる。貴公らとは、たまたま山中で出会ったに過ぎぬ」

枯れ枝や落ち葉が堆く積もった上を、まるで体重が無いかのように長瀬は歩む。春日野は長瀬が足袋しか履いていないのに感心したが、そこで興味を失い再び深い眠りに落ちた。慌てて長瀬を追う騒がしい足音は雑音とさえ意識されなかった。

つるべ落としと言う言葉があるが、深山の森の夜は何時だつてつるべ落としだ。陽の色に僅かに朱が混じれば、山で生計を立てる者でも早々に下山する。山の夜はまるで視界が効かないコーラルのような闇だ。独自の質量を持つ闇は畏怖を駆り立て人の世界ではなくなる。夜陰がつるべ落としなら、夜の山の冷気も唐突だ。一気に冷え込む。その冷気は人里のそれと異なり、質量のある冷気だ。ずっしりと重くのしかかる。

大木の上の太い枝に横たわっていた春日野の肉体が、密度の増した闇の冷気に覚醒する。春日野の横たわる枝はそれ自体、人一人が横になっても、まだ余裕のある代物だが、当然、人が

寝るような形に伸びている訳ではない。そのような場所で熟睡するには、それなりの修練が必要だ。熟睡しても枝から落ちぬよう無意識にバランスを整える技が要る。

忍者が跳梁跋扈していた時代なら、自営も兼ねてそういう技も必要だった。また、それが出来なければ剣の修行に全国を行脚するのは不可能であったし、その域に達した達人でなければ生き残ることは不可能だった。現代ではそんな術は必要無い。剣の修練の中で春日野が自然に身につけたものである。

肉体が目覚めると共に春日野の精神も目覚めた。目を開けると満月が青く輝いている。

(新月ならば良かったな……)

春日野は漠然とそう思う。自分の手先も見えぬ闇でも春日野は自在に動ける。戦うならそういう闇が望ましかった。春日野は寝そべったまま、全身の重心を僅かにずらす。春日野の肉体は自然に落下する。五メートル程の落下の間に春日野は猫の様にくりりと回ると足から着地した。首をこきこき鳴らしながら、春日野は舗装された道を歩むように白鷗神社のある神山を目指す。春日野の足下には枯れ枝や枯れ葉が堆く積もっているが、足音はしない。ちなみに春日野は裸足だ。その足の皮は修練で靴底の様に厚くなっている。いったん稜線を下り、再び登りの斜面が出ればそこは白鷗神社の聖域である。春日野の足なら半時もかからない。聖域の森はこれまでの道程とは一変する。少なくとも二千年以上人手が入らぬ原生林だ。足下には人の胴体程の太さの根が縦横無尽に覆っていて、夜で無くても普通の人間には進めるものではない。寿命が尽きて倒れた大木がいきなり転がっていたりする。あちこちに巨岩も顔を出している。それら全てが深い緑の苔に覆われているので、普通に進めば足が滑る。聖域に入ったとたん、春日野の動きは激変していた。原生林だから月明かりも届かぬ闇だと言うのに、春日野は地形を把握しているように天狗の様に飛んで進む。その速さは尋常で無い。まるでスプリンターである。

唐突に春日野は苔むした巨岩の上で立ち止まった。

大量の血と臓物の生臭い臭いが風に漂っている。

春日野はその方向に飛んだ。岩から転げ落ちた骸と大木に背を預けた骸が転がっている。長瀬に置き去りにされかけた例の二人であった。二人とも抜刀していない。いや、岩から落ちた骸の側には小刀が転がっている。小刀の鞘は骸の腰にある。春日野はうつぶせの骸を足で仰向けにした。腹を真一文字に切り裂かれ、臓物がはみ出している。首の動脈もばっさりと斬られて、未だ血を吹いている。岩の上から血痕が続いている。もう一つの骸は岩の下の巨木にある。こちらは刀の柄に手をかけているが、抜刀にいない。心臓を深く一突きされて絶命している。長瀬の槍によるものは明らかだ。

(愚かな輩だ……)

そもそも、この野試合に群れると言う発想を抱いた段階で死は決定されていた。そして長瀬のような化生と行動を共にするのが決定的な過ちだった。長瀬はこの二人が随行した段階で、

最初の得物に決めていたはずだ。春日野は状況を見渡し、瞑目する。二つの骸に興味はない。長瀬の立ち会いを読んだのだ。

すぐに分かった。

まず、岩の上で一人が足を滑らせたのだ、長瀬は確実に殺れる機を得た。自然に足を滑らせた男の脇差しを抜き取り、腹を切り裂き返す手で首を斬ったのだ。もう一人は慌てて間合いを取ろうと岩から飛び降りた。おそらく夜目が利いていなかったのだろう。巨木に背中をぶつけた。その瞬間、岩から矢のように長瀬の槍が心臓を射貫いたのだ。およそ一分も要していまい。

何の感慨も無く、長瀬は即座にその場を去ったはずだが、足跡が無い。そこで春日野は思い至る。長瀬は木の上の春日野に気づいていたのだと。あの歩法なら、足音は立たない。長瀬は春日野に届くか届かないかの足音をわざと響かせ、挑みかけたのだ。

（―― よろしい。受けて立とう）

足跡は無くとも血の臭いは残る。しかも春日野は血の臭いの個人差を感知出来る。この神山のそこかしこで血潮の吹き出る立ち会いが行われているのだろうが、春日野はそれに迷うことなく長瀬を追える。これ程の遣い手に挑発されては、今年の勝者として応じない訳にはいかない。長瀬も立ち会いに適した場所で待っている筈だ。春日野は再び天狗の様に血の香を追って跳躍した。

およそ半時。春日野は長瀬を追った。その半時の間に六名の参加者と遭遇したが、全員頭蓋を砕いた。只の一撃で。春日野の持つ棒は枇杷で出来ている。重く頑丈で、枇杷の木刀で打たれると、三年後には骨が腐ると言われている。並の刀剣なら軽く受け止める代物で現代では作られていない。そんなもので顔を突かれたら、人相の判別も出来なくなる。

もともと、春日野は六名の手練れと遭遇していながら、天狗の様な跳躍を只の一度も止めていない。骸になった者には春日野の姿を見ることが出来なかった者もいる。一陣の風が通り過ぎたら絶命していたと言う状況だ。中には太刀を抜き一閃を放った者もいるが、春日野の意識には彼らと対峙した記憶すらない。彼は無念無想で駆けた。技は無意識に出ている。春日野の肉体が対峙の記憶を宿しているが、今、神山を駆ける春日野の精神は肉体を離れ、明鏡止水の状態にある。故に対峙の記憶は後に肉体から引き出して認識したものだ。

――？

春日野は僅かに跳躍のスピードを緩めた。血の香が薄れている。そして別の無数の血の香が感じられた。

一瞬、遅れて春日野は耳朶に響く滝の音を認識した。清々しく凜とした冷たさを感じさせる清流の香りが鼻孔を満たす。このために血の香を追う感覚に僅かな狂いが生じたのだ。

春日野は背を伸ばして立ち、瞑目して感覚を研ぎ澄ます。

血の臭いは十メートル程下の清流の辺りから漂っていた。

（見誤ったか……）

清流は崖下にあると言えた。ほぼ垂直の崖は流石に下りる訳にいかない。春日野の体術なら下りられないことはないが、立ち会うには地の利がなさ過ぎる。

と、強烈な血の臭いが眼下から立ち上った。春日野の嗅覚でも何人分の血潮なのか判別が出来ない。少なくとも一瞬前に五人は切り伏せている。血の湯気が立ち上っている。川辺に現れたのは小柄な黒い人影だった。黒の皮のライダースーツ、黒の皮の手袋、だがブーツはライダ―用ではない。工事現場で使われる底に鉄板を仕込んだものだ。身体のラインが若い女性であることを誇示している。

——鳴神あさぎ！

春日野は息を飲んだ。あさぎは頭から大量の血潮を浴びている。それは湯気を立てていた。あさぎの身体から発散される血の香はもう個々の判別がつかない。ライダースーツも血が染み込んでニカワのように乾いており、動きづらそうだった。

あさぎは川辺の五メートル手前で立ち止まり瞑目する。気を探っているのだ。あさぎは血糊を洗い流したらしい。だが、油断は無い。こうして気を探っている。春日野はあさぎの出で立ちに感嘆と驚愕を覚えた。驚愕はあさぎが無手であることにある。得物を落とす様な娘ではない。だとすれば、あさぎは端から無手でこの神山に入ったのだ。相手の得物も知れぬこの野試合では有効な手だ。ただし相当な自分の力量への自信が無いと出来るものではない。そして、あさぎの出で立ちには野試合では実に効率的と言えた。動きの自由度もある。革手袋は血糊に染まっても得物を落とす確立が低くなる。そして鉄板仕込みの工事用ブーツはそれ自体が強力な武器になる。あさぎは野試合への推挙を聞いたその晩に姿を消している。命をやり取りする立ち会いを熟知しているとしか言えない。達人は試合相手の普段の所作を垣間見るだけで、その動きを察する。あさぎは本能からそれを避けたのだ。中学を卒業したばかりの少女に出来ることではない。

川辺の白砂は月の光を反射して青白く輝いている。当然、あさぎの姿も月明かりに露わになっている。悪鬼羅刹のように血を浴びながら、あさぎの表情には緊張が無い。ほのかに微笑んでいる。春日野はその表情に戦慄を覚えた。殺気も緊張もない自然な少女の愛くるしい表情は、白昼に龍を見るほどの脅威があった。

あさぎは意を決したらしい。ブーツと手袋を脱ぎ捨て、ライダースーツのチャックを下ろす。ライダースーツの下にあさぎは下着も着けていなかった。

幼さを残す白い裸体が月光に照らし出される。鍛え抜かれた身体はそれだけで芸術品を思わせた。少女へと変貌したその裸体は神々しくさえあった。清流へ向かう際、あさぎはふつと唇を笑みの形に歪めた。春日野はその笑みに背筋が凍り付いた。果たして清流の側の茂みに長瀬水樹が槍を構え、今まさに襲いかからんと身構えていた。あさぎの異様さに気圧されているのか？ 氣息が乱れている。あさぎはそれに気づいて笑ったのだ。その上で全裸をさらし、水浴みをしようとしている。得物も無い状態で、一糸纏わぬ芸術品のような姿を敢えて晒している。

春日野は喉が渴き、痛みすら覚えた。それでも途中で叫んでいた。

(長瀬！ 退け！ 読まれている。殺されるぞ！)

一糸纏わず水浴みをする少女に、長槍を手にした鬼神の様な遣い手が敗北する道理は皆無だ。だが、春日野の本能が長瀬の凄絶な死を知らしめている。

清流の中央であさぎが背を向け、髪にこびりついた血潮を洗い流し、その水気を払った瞬間、長瀬が跳躍した。

『縮地』

武道の奥義。一瞬で間合いを詰める神業を長瀬は使った。その槍の速度、音速と言っても過言ではない。あさぎの背中から心臓を射貫く一撃は春日野にも殆ど見えなかった。だから、長瀬の動きが止まった時の光景は悪夢と言えた。

長瀬は清流に顔を突っ込み土下座するような姿勢で止まっている。その真横に微笑んだあさぎが立っている。水に濡れた恥毛が月光に輝いていたのが印象的だった。

あさぎは自然体で立ち、長瀬を見つめている。両手はだらんと下げている。しかし、長瀬は肩胛骨と肩胛骨の間から槍の柄を生やしていた。穂先は口中から出て、深く水底に刺さっている。長瀬の口から大量の血が噴出し、身体があり得ない痙攣に蠢いていた。

鳴神あさぎは何の感情も無いガラス玉のような目で長瀬水樹が事切れるのを見つめていた。長瀬水樹だったものが只の肉塊となった時、あさぎは月を仰ぎ見た。まるで魂が天へ帰るのを見送るような動きであった。

(——ヤバイ！)

春日野は思わず鳴神あさぎの視線より逃げて、大木の後ろに隠れる。今、気づかれたら殺られる。本能的にそう思ったのだ。氣息を殺しピクリとも動かなくなる。

暫しの間の後、崖下の清流からは、あさぎが水浴びをする音が響き始めた。

(何と言う娘か……)

春日野はそう思わざるを得ない。あさぎは自ら殺めた骸の横で平然と水浴びを再開したのだ。春日野でも骸の側に長居したいと思わない。骸に対し畏怖と嫌悪を抱くのは人間として当たり前の性である。あさぎにはその感性が無い。月光の下、自ら殺した骸の側に全裸で立ち、水浴びをする少女。春日野は頭に浮かんだその光景に戦慄した。どんな地獄絵図なのだど歯軋りする。あさぎは衣服も洗い、ゆったりとした歩みで川辺から消えた。あさぎの気配が完全に失せても、しばらくは春日野は動かなかった。半時程して、漸く崖下を覗く。槍に貫かれた長瀬水樹の骸が蒼い月光に照らされている。あさぎは槍を持ち去らなかつた。無手のまま立ち去った。読めない。まるで底が読めない。白鷗神社の野試合に参加するような者は人の域を超えた猛者ばかりだ。そこに絶対の強者はいない……筈であった。春日野のような一度勝者として名を馳せた者は普通二度と参加しない。それこそ宝くじに当たるような幸運で生き残った命である。無駄に捨てる馬鹿はいない。

が、鳴神あさは違う。あさは生死など微塵も気にしていない。絶対的強者と言う自覚は無いだろうが、負けるという考えがない。いや、こうやって人の器で鳴神あさを考えれば、自ずとあさに飲まれる。あれは人外の化生だ。無念無想で対峙し、これまでの修練が自然に発動するに任せる。それしか手は無い。春日野は漸く立ち上がり、真っ直ぐに社に向かった。

境内へ通じる石畳の階段の最上段に春日野は座った。試合放棄と言われても仕方が無い態度だったが、背に腹は変えれない。払暁は真っ直ぐに石畳の階段から現れた。石畳の階段は白く輝きまるで陽へ至る道に見える。朝の鳥の囀りが耳に痛い。と、唐突に鳥の囀りが止んだかと思うと、一成に空へと飛び去った。空が黒く染まる。が、春日野は微動だにしない。真下に視線をやり、すっと肩に添えた棒を軽く握った。

鳥たちの羽音が遠くに消える。すると最初からそこに居たかのように、五メートル下の石畳の階段に自然体で立つ小さな黒い人影がぼつねんと在った。それは春日野が見えていないかのように、ゆっくり階段を上って来る。三メートル程手前でそれは立ち止まり、顔を上げた。ひまわりの花を思わす笑顔を浮かべていた。

「あら？ 春日野のおじさまではありませんか？ お久しぶりです」
ぺこりとお辞儀をする。

「ああ。久しい。久しぶりだね。良く私だと分かったものだ。面変わりしたのだから」

「あら？ 貴方は昔のままですよ？」

あさは少女の声で笑う。だが、幼い少女の身体のラインをはっきりと示すライダースーツは真新しい血の臭いを漂わせていた。

「昔から進歩が無いと言われた気がするね」

血臭を無視して春日野は苦笑いする。あさはそれには答えず、ただニコニコと微笑んでいる。先程から身体は微動だにしていない。ただ自然に立っている。気負いも警戒も無い隙だらけの姿勢。それ故に打ち込めない。自然体だからどのような攻撃にも対応出来る。たとえ銃で撃っても弾丸すら避けるだろう。

「立ち話もなんだ。ここに座りなさい」

春日野は微笑んで自分の横の石を叩く。あさは一瞬、目を丸くする。そして、クスクスと笑うと楽しい少女の足取りで階段を登り、ちよこんと春日野の横に座ると無邪気で朗らかな笑顔で春日野を見上げる。その健やかな自然と香り立つ少女の色香に春日野は僅かにたじろいだ。あさぎには殺気のかけらも無い。側に座られると、ライダースーツが鮮血を吸っていることが分かるのに、僅か一瞬前には人を殺めていたと言うのに、そんなことは些事とすら思っていないのだろうか？ あさぎは旧知との再会を喜ぶ少女以外の何者でも無い顔で笑みを含んだ視線で春日野を真っ直ぐ見つめる。

その視線が面映ゆく、春日野は尋ねる。

「どうした？ わたしの顔に何かついているのかい？」

すると、あさぎはクスクスと笑った。

「ごめんなさい。春日野さんも変わったんだなと思ひ直しました」

「——どう変わったのかな？」

あさぎの答えに期待を込めて尋ねる。あさぎはじつと春日野を見つめた。

「ロリコンになりました」

そう答えると、あさぎはケラケラと笑い足をばたつかせる。それは酷いと春日野は抗議した。「だって、思春期の娘を良いお歳なのに、真横に座らせるなんてロリコンじゃないと出来ませんよ」

それに乗るわたしもわたしですけれど、あさぎはそう答えて笑いを嚙み殺す。それでも身体が笑いに小刻みに震えている。

これはこれで、あさぎに飲まれているのかもしれないと春日野は思い単刀直入に訊いた。

「何人殺したんだ？」

あさぎは目を丸くして笑いを飲み込み春日野を見つめる。そして拗ねたようにそっぽを向く。「嫌な人。折角、楽しいお話をしていたのに。そう無粋だと女性にもてませんよ」

こまつしゃくれた事を言う。春日野は苦笑するしかない。確かにここ五年は女性とまともに話もしていないと素直に答えるとあさぎは又、笑う。だが、春日野は食らいつく。

「——で、何人殺したんだ？」

あさぎは今度は無表情になり瞑目する。その横顔を良く見ると睫毛が長くカールしている。肌も白く、思った以上に整った顔立ちをしている。五年もすれば人目を引く美女になると春日野は思った。

しばし無言で瞑目していたあさぎだったが、ふっと目を開け遠くを見る目つきで答えた。

「一人も殺していないわね。自ら屠った記憶は無いもの……。死体はいっぱい見たけれど、あれは自分から死んだ人たちだもの」

それが、あさぎの正直な答であることは春日野には分かった。そして屠らねばならないと決意した。神であれ、悪魔であれ、人でない者は人の世に居てはならない。

「——そうかい。君も変わったね。柳生の免許皆伝は伊達じゃないんだ。なにより、見違えるほどに綺麗になった」

惚れるよ——そう春日野が囁くと「やだー」とあさぎは嬌声を上げ、朱に染まった頬を押えて、足をばたつかせる。その瞬間、春日野はあさぎのこめかみに渾身の突きを放っていた。あさぎは嬌声を上げたままだ。だが、身体が背から仰け反る様に傾く、春日野は背筋が凍り付いた。これだけの近距離で突きを外されたのだ。勢い棒は虚空へ伸び、春日野はあさぎに組かかる姿勢になる。あさぎはひょいと右手の平で棒を押す。軌道が外にずれて春日野は階段を踏み外しそうになる。ほぼ同時にあさぎは左手の平を逆手にして棒の先端を握る。それだけの動

作がほぼ一瞬。てこの原理で春日野身体は自らの力で宙に浮く。

(落ちる！)

そう思った時には春日野の手に棒は無かった。あつと春日野は口を開けた。力を使うことなく棒を奪ったあさが、その棒を振りかざして跳躍していた。春日野を見据える眼に感情は一切無い。底なしの暗闇の様な眼はサメのようだ。春日野は後頭部から落下した。その直後、開いた口蓋に棒が突き刺さる不快感。その感覚を最後に春日野の意識は闇に落ちた。口から入った棒が後頭部を突き破ると言うおぞましい姿になった春日野を、あさはまだ棒を突き刺した姿勢のまま見据えていた。断末魔の痙攣が始まると、棒を離し、振り返りもせず境内へと登る。白く整った顔には何の感慨も伺えなかった。境内では宮司を先頭に神社の関係者が、恭しく土下座してあさを迎えた。

翌朝、あさは払暁前に自宅のベッドで目覚めた。日課のランニングを済ませると、朝餉の支度に入った。台所の気配に起きてきた八千代は驚愕の声を上げた。

「あさが！ 貴女いつ帰って来たの？」

「うん？ 昨夜遅く。ただいま。お母さん」

「ただいまって……、貴女、怪我は無いの？」

「無い。無い。お母さん。身体触らないで。支度が出来ない」

そこに寝間着姿の威三郎が駆け込んで来る。

「あさが！ 無事か？」

「もう、なによ？ 二人とも？ 紛争地へ行った傭兵じゃないんだから。ただの神社参りだから。無事に決まっているでしょう？」

いや、紛争地へ行くより遙かに危険だろうと威三郎は思ったが、あれの参加者は堅く口を閉ざすものだ。威三郎は質問を変えた。

「春日野君には会えたかい？」

あさはその質問にエプロン姿で首を傾げた。

「春日野？ 誰？ その人。そんな人、もう居ないよ」

その答えに威三郎は慄然とした。足下に地獄の蓋が開いた様な恐怖に打ち震えた。

——八年か……。

朝餉の支度をするあさぎの姿を見ながら八千代は感慨にふける。あさぎの帰宅からの八年間、それはまさに栄光への道のりそのものだった。あさぎの後ろ姿を眺めていると自然に『栄光への架け橋』と言うポピュラーソングを八千代はハミングしていた。

桜花女子大学付属高校へ進学したあさぎは、入学受付のその日に剣道部顧問の教師と校長・教頭に待ち受けられていた。柳生からの声がかかっていたのである。日本剣道連盟の段位は持っていないあさぎであったが、最年少、しかも女子の身で柳生の免許皆伝を得ていることが伝わっていた。平身低頭で剣道部への入部を依頼する教師達にあさぎは明るい笑顔を返し、頭を下げて了承した。

上級生の剣道部員はとてつもない大型新人の入部を知らされていた。が、校長らがいそいそと連れてきた少女は小柄で大きな目の愛くるしい美少女で、声も透き通ったものだった。剣で鍛えた者独特の声ではない。彼女らに軽愚の色が見えたのも止む得ない。朗らかな笑みで「これからよろしくお願いします」と頭を下げたあさぎだが、その軽愚を見抜かぬ筈もない。道場を後にしたあさぎは入部条件に部員全員との総掛かり試合を希望した。桜花女子大学付属高校剣道部は創立以来七十年の歴史があり、華族や士族の腕に覚えのある娘達が凌ぎを削った所から始まっている。創立当初より全国レベルの水準の高さで名を馳せ、未だ地に墜ちていない。今は日本全国から推薦枠で入部する部員が半数。部員総数は七十名余り。盆・正月も休むことなく苛烈な稽古を続ける。新入部員の殆どは夏には血の小便を出して昏倒するような所だ。それを乗り切った七十名余と総当たりと言うのはらち外である。が、顧問は受けた。柳生の免許皆伝がそのらち外を遙かに凌ぐものであると心得ていた。が、いざ試合が始まると、その顧問ですら顔色を無くした。あさぎの剣筋は竹刀剣道とはまるで違った。正に叩き斬ると言う言葉が相応しい壮絶な打撃をする。古流にありがちな太刀筋だが、普通は竹刀剣道の迅速な業の前には田舎臭いもので、試合ではものにならない。が、あさぎの太刀は洗練されていた。なにより大振りであるに関わらず、竹刀剣道の技並みに早い。あさぎの打突は面、小手、突きに限られていたが、殆どの部員が一撃を受けると立てなくなつた。面や突きを喰らうと気絶する。小手を取られると竹刀が握れなくなる。なにより不気味なのは竹刀が擦れ合う音すらしないのだ。あさぎは試合開始と同時に中段の構えの見本のような姿で音もなく間合いを詰める。それだけで異様な恐怖に殆どの部員が飛ぶように引く。叱咤の声に、前に出ようとする。その瞬間に技を取られているのだ。

日本剣道連盟の下で行われる竹刀剣道は北進一刀流に極めて近い。互いに剣先を小刻みに動かし、剣を摺り合わせながら打ち合う。初撃で一本決まる事は少ないから、鏝迫り合いとなり、互いに氣息を計りながら離れる時も技を出し合う。手数が非常に多くなる。だが、その技

の早さは一般人の動体視力を遙かに超える。大技である遠間からの面の一撃が0.5秒（成人男子）である。技の応酬ともなれば、互いに勢いよくすれ違ったとしか見えない。が、剣の達人とも言える審判員は、一般人には同時の打突にしか見えない技の優劣を見極める。0.1秒あるかないかの技の差を正確に捉える。超スローカメラでも差が分からない世界だ。

あさぎの剣は竹刀剣道の常識を凌駕していた。竹刀剣道の癖で剣先を摺り合わせようとした時には、僅かな切っ先のズレに生じる間を、それこそ目にも止まらぬ速度で飛び込み切り倒す。相手はあさぎがいきなり消えたように感じる。感じた時には意識を持って行かれるような衝撃に見舞われる。

僅か七、八分の間に部員の七割が一撃で昏倒すると言う異様な光景に意識のある者は戦慄と恐怖を覚えた。しかし残る部員は全校代表の座を争う猛者だ。あさぎに普通の剣で対応出来ぬことを悟り、スタイルを変えて来た。大抵は大柄でそこらの男よりも筋力がある強者だ。ある者は上段で圧倒しようと試み、ある者は最初から突き一本に賭けているのが分かる構えであさぎに望んだ。結果、強い者ほど悲惨な結末を迎えた。雷撃のごとき突きで望んだ主将は突き返し突きと言う、伝説の技で喉を破られ、道場の羽目板に突き飛ばされた。突きのクロスカウンターだと思つて貰えば良い。彼女は大喀血して一ヶ月の入院を余儀なくされた。他のレギュラーメンバーも同様である。防具を着けた竹刀の撃ち合いで、手首にヒビを入れられるとは普通思わない。上段からの面を飛翔してかわし、脳天に金属棒を打ち込めれるような衝撃で、痙攣して意識を失う者もいた。試合開始から僅か十五分後には、自力で立てる部員は居らず、校内に救急車のサイレンが轟く事態となり学校関係者はおののいた。

あさぎはショックのあまり立ち尽くす顧問に言った。にこやかに笑っていた。

「先生。心配しないで下さい。本気出すのはもうしません。普通の竹刀剣道も出来ますから」その年の王竜旗大会には、あさぎは自ら望んで先鋒で出た。王竜旗大会史上初の四十人抜きで、桜花高校を優勝に導いた。何のことは無い。あさぎ一人が戦い、自校の次鋒以下に順番を渡さなかったのだ。オール一本勝ち。竹刀の打ち合う音は無く、あさぎの化鳥のような掛け声と、その激しい打突の音のみがすると言う異様な試合だった。極一部の剣道関係者の間では、すでに恐れを持って知られていた『鳴神あさぎ』の名は畏怖の代名詞の様に全国に知れた。剣道関係の雑誌は一面トップで、全国新聞もスポーツ欄に写真入りで報じた。一見アイドルのような愛くるしいあさぎの笑顔が売れると思ったのだろう。その時、あさぎを大々的に報じた『剣道日本』と言う雑誌は半年後には数十万年の高値でオークションで落札された。インターハイ女子剣道優勝。全日本女子剣道大会優勝。高校一年生で剣道界にデビューしたあさぎは段位を持つていなかったこともあり、メディアからの注目が集まった。試合中の凄まじさとはかけ離れた、面を取った時の華やかな笑顔は全国規模で映像が流れると同時に、剣道を志す幼い少女を虜にし、剣道などまるで知らない軟弱な少年・青年達の心も奪った。彼らは剣を知らぬが故に『音無しの剣』『無敵の美少女剣士』と言うマスコミの煽り文句に釣られて心を奪われた。

その成人男子にも見られない凄まじい突きは彼らの間で『牙突』と呼ばれ、鳴神の家の前には常にカメラを持つオタクな人々が集まり、威三郎が怒号を持って追い払う日々になった。

皮肉なことだが、こういうことを最も嫌う妹の遙日も彼らオタクの目に止まり、話題になった。それこそ息を飲む様な美少女である。人を近づかせない独特のオーラは逆に畏敬を呼び、オタクの世界では『妹君』『姫神』と言えば遙日を指す代名詞となった。

鳴神道場にはひっきりなしに入門希望者が押し寄せ、また、あさぎの凄まじさを知った古武道の達人も立ち会いを申し入れるようになった。半ばノイローゼになりかけた鳴神夫妻であったが、それは一年もせず解決された。皮肉なことに原因となったあさぎの人脈が物を言ったのだ。あさぎは柳生で高貴な来客があれば必ず接待をしていた。茶席では主人として振る舞い、その見事さは著名で、相当な愛顧を受けていたのだ。この国で貴人と呼ばれる人々はその気になれば、大臣の首を変えることすら造作もない。鳴神家は制服警官ではない公安関係者が二十四時間監視に付き、カメラを持つようなオタクは有無を言わず一晩臭い飯を食う羽目になった。根性は無くても情報伝達は異様に早いオタク達はあつと言う間に見かけなくなった。また、あさぎと遙日の登下校もどこからともなく現れる黒い高級国産車が請け負った。運転手はいつも同じだが、登校の経路は順次変えていた。

道場の入門は審査制にするので凄いだが、問題は月に一人は現れるあさぎとの立ち会いを所望する輩であった。これは、あさぎが解決した。彼らにあさぎはまず、柳生へ行くよう申しつけた。柳生が立ち会うべしと言えば、柳生で試合うとしたのである。柳生からそのような連絡が来たことはこの八年間ついぞない。天下の柳生は伊達ではなかった。

威三郎は何も言わなかったが、あさぎが柳生でも御しかねた化生である事がさらに重く威三郎をおののかせたのだった。

爾来、威三郎はあさぎの目をまともに見れない状態に陥るのだが、八千代にはそう言うことは分からない。あさぎが公式、非公式を問わず、只の一本も与えず常勝を誇り続けていることを誇りにしている。非公式の試合では全日本を三度征した警視庁の誇りと呼ばれた男ですら、突きの一撃で病院送りになっている。ただ、この試合でのあさぎの突きは沖田総司にしか出来なと言われた三段突きで、敗れた男が逆に賞賛されたと聞いている。八千代も剣を嗜んだ身であるが、三段突きなど想像すら出来ない。ただ、そんな神業を引き出せると言うのは確かに賛辞に値するのだろうかと思う。

あさぎは常勝のまま、難関とされる地元の国立大学へ進み、心理学を専攻して教員免許を修得した。無論、大学でも剣道部に在籍しながら学問に励み、優秀な成績を収め、ゼミの教授からは大学院へ進むよう言われたのを断って教員の道を選んだ。あさぎが教員免許を取った時には、どこで聞きつけたのか、日本全国の剣道の強豪校から誘いが殺到したが、あさぎは家を出たくないと言いつ張り、地元文武両道で有名な高校への就職を決めている。本来の教員の給与とは別に剣道部顧問の報酬も提示されたが、それは本給を大きく上回り、流石のあさぎも戸

惑いを隠せなかった。それは年頃の娘らしい愛くるしい戸惑いで、八千代は思わず抱きしめなくなる衝動を必死に抑えたものだった。

思えば、家を出たくないと言うあさぎの意志は、幼少期に家を追われた反動かもしれない。そう思うと八千代はあさぎがずっとこの家に居れば良いのにと思ってしまう。高校教師に収まった鳴神あさぎを惜しむ声は多く聞いている。あさぎは今や日本剣道連盟の看板そのもので、日本はおろか外国にもその名は知られる。高貴な名門の家中に呼ばれ、剣技や茶道の腕を振るうことも少なくない。あさぎは謝礼を頑として受け付けないので、お礼の品として届けられる物は目を見張るものがある。その一つを売るだけで、生涯喰うに困らないような品だ。流石に今は慣れたが、最初の頃は迂闊に触ることすら恐ろしかった自分を思い出し八千代はクスリ笑う。そう言う娘だ。婿養子を取ることに無理があるとは思わない。残念ながら、あさぎを神の様に崇拜する男は多数いるが、対等な関係を結ぼうと言う者はいない。それは、高校・大学時代のあさぎの友人も同様で、皆、敬称であさぎを呼び半ば畏怖すら感じさせる。その意味ではあさぎは今も孤独なのかもしれない。

孤独と言えば、あさぎの神業とも言える三段突きが実戦で披露されたのはこの時限りである。

あさぎの三段突きを受けた相手はそれを境に公式戦から身を引いた。

『孤独の女王』

何とも寂しげな呼称があさぎに定着したのは、この試合以降である。同時にあさぎも滅多に試合に応じなくなった。武を誇る神社の奉納試合や、名家の招きで形や居合い斬りを披露することが増えた。

白鷗神社からは三回招きに応じ、その三回目に『天下無双』と刻まれた文字通り純金製の金看板を授けられ、以後の参加を固辞された。武道の水脈が枯渇すると各流派からの進言があったと言う。あさぎは「重い」と言う理由でその看板を受け取らず帰った。

あさぎが出る公式試合は日本大会のみになったが、その剣風は一変した。それまで、あさぎの出る試合には救急車が待機したのだが、その必要がなくなった。あさぎの持ち味であった閃光のような打突が消えた。常人並みになった。それでも打突の激しさは凄まじかったが、今までのように一撃で相手が立てなくなることは無くなった。鳴神あさぎは漸く手加減を覚えたのだ。しかし、明かな手加減で試合に臨んでもなお無敵。未だ、鳴神あさぎから一本取る者はいない。それ故の呼称であった。面を外している時は常に在ったひまわりのような笑顔は道場から消えた。あさぎは後身の育成に心血を注ぐようになったが、その稽古は苛烈を極めた。それでも、あさぎに憧れる剣士は後を絶たず、稽古で気を失っても「参った」の一言を言う者はいなかった。

柳生流は実戦剣道の中でも洗練されたものである。それでも試合では弱かったのだが、鳴神あさぎは実戦剣道こそ極めれば竹刀剣道が及ばぬ事を立証した。これは日本剣道連盟にも大

きな波紋を与え、早さだけの重みの無い打突では一本と見なさなくなった。が、それも鳴神あさぎが全国大会に義理で出るように変わってからの話だ。それでも前人未踏の八連覇である。噂でしかないが、八千代はあさぎが全日本剣道連盟の幹部を前に引退を懇願したと聞いている。あさぎは無念だろうと思う。残念だろうと思う。こんな形で剣の世界に孤独を感じた者は古今問わずいないと言えた。

残念と言えば、遙日である。

遙日は中学の頃からその美貌で町内に知れ渡る程だったが、年頃になるにつれ、八千代ですらおののきを覚える女神のような美貌を持つに至った。姉のあさぎとは会話を普通に交わしているようだが、両親とは徐々に口を利かなくなった。加えて、高校生の頃から放浪癖が出た。女子高生の不良の放浪癖とは趣が違う。八千代には良く分からない山深くの霊地などへふらりと出かけ、一夜明けて帰る様な奇癖が出た。叱るよう威三郎に願ったが、威三郎は遙日には異様に甘い。一応、どこへ行つたか尋ねはするが、そこにどんな神がおわすかを聞いただけで喜色を浮かべて「良く帰った」などと言うのである。あさぎには真逆で、娘らしく良く喋るあさぎには生返事しかない。あさぎが家の道場に出る日は道場にも行かず書齋でごろごろしている始末である。

あさぎは剣さえ握らなければ、明るい普通の娘だが、なまじ不敗伝説を打ち立てたばかりの孤独がある。それは本人が望んだものではないだろう。遙日はその人離れた美貌で崇拜に近い対応を受けている。美しくなればなるほど口数が減り、神秘性を帯びて同性の友人も声を賭け辛い。一人、深山に入るような奇行は増えていった。まるで自ら孤独を選んでいるようだ。と八千代は思う。威三郎が遙日ばかりを構うからか？ 八千代は正直、あさぎの方が可愛い。少なくともあさぎが言わねば、遙日は台所に近づきもしないのだ。

八千代にすれば、女としての魅力はあさぎにあると思う。確かに美貌は遙日の上だが、それは人の域を離れてしまっている。あさぎは高校生の頃は剣道界のアイドル扱いされた程に愛くるしかった。成人してからは落ち着き加わり、一本筋が通った美人になったと八千代は思っている。少なくとも若い時の自分など足下にも及ばない。

が、およそ愛想と言うものを無くした遙日には男が出来た。あさぎには男の気配すら無いと言うのに。

随分、年上の男であったが渋く落ち着いた男前で、新進の日本画家であると言う。遙日と付き合うに当たり、威三郎と八千代に挨拶に来る辺りは好感が持てた。が、指定の日は姉のあさぎが全日本大会へ赴いている日であった。八千代は女の勘で、遙日があさぎを避けたものと思った。威三郎は文句こそ言わなかったが始終不機嫌で、遙かに若い男と比べても大人気ない態度に終始した。

今、遙日はその日本画家の家に泊まり込みである。個展の準備を手伝っている。その旨は事前に遙日が両親に説明した上での話だから咎めるに能わない。が、遙日が決めたことを覆す

ことは八千代は勿論、威三郎にも出来ないことを遙日は承知している。ずるい。

遙日のことを八千代はそう思う。その所為もあつてか、朝餉の支度に励むあさぎの背中が輝いて見える。すると、ひまわりの様な笑顔であさぎが振り返った。

「出来たよ。母さん」

いつもの合図で、八千代はあさぎと共に配膳を済ませて、書齋に籠もる威三郎を呼びに行く。

朝餉の間、居間の「△」を点けて眺めながら食事をするようにあさぎは変わった。柳生から帰ったばかりの頃は、食事中に「△」を点けたりはしなかったが、ここ最近随分とくだけた様子だ。「△」のニュースを話題にたわいも無い話をしてはコロコロと笑う。八千代も釣られて笑うが、遙日がいないと威三郎は仏頂面を隠しもしない。あさぎが話しかけても生返事である。あさぎは健啖家だ。食事の量が多い。まあ、運動量と仕事内容を考えれば、あれぐらい食べないと倒れるだろう。激務だと言うのに、未だに陽の出前に起きて走り込みは欠かさない。その体力と精神力は凄いものだと思える。

両親より早く食事を済ませると、あさぎは手を会わせると自分の食器を流しに運ぶ。昔は洗い物まであさぎがしていたが、大学生になってからは八千代が言い出して、遙日と共に洗物をするようになった。まあ、その遙日は今は居ない訳だが。

あさぎは伸びをしながら、のんびりと階段を上ろうとする。ふと違和感を八千代は覚えた。いつもはもう少し、きびきびと動く娘だ。

「あさぎ、今日はお仕事は？」

「ああ。創立記念日だから休みだよ。久々にのんびり出来るわ」

そう答えてひらひらと手を振るとあさぎは自室に戻った。

休みだから遊ぶと言う発想もお誘いもあさぎには無いらしい。

まあ、休みの日にはどこかの名家からの迎えの車がやってくるような娘だ。およそプライベートの時間は無い。住む世界も感覚も違うのだろうと八千代は思う。

そう言えば——と八千代は思い出す。遙日が天野と言う男を連れてきた翌日。当然のように全日本を征して帰って来たあさぎに、八千代は秘め事を話すような仕草で遙日の一件をあさぎに告げたのだ。

「へえ。はるちゃん。やるじゃん」

あさぎは素直に祝福らしき言葉を言った。

あさぎは顔がとにかく広い。驚く程に広い。だから八千代は尋ねた。

「天野忠臣って言う日本画家の人だけど知っている？」

荷物も玄関口に置いて、あさぎはあごに指を当てて宙を見る。

「天野……天野忠臣……ああ！ 成る程。あの男ならはるちゃんから惚れ込むわ」

「会ったことがあるの？」

「すれ違ったことはあるかも？ でも、絵は知っているよ。ああ言う絵は普通は描けないわね。天才とは言わないけど、奇才よ。一部の好事家ではもてはやされつつあるわ。はるちゃんとはお似合いだよ」

「ちゃんとした人なのかねえ。画家なんて食べていけるのかしら？」

「絵を見る限り、筋を通す人だと思わよ。食べる心配はないんじゃないかな？ 一流で名が残るかもって聞いたから。少し病弱と聞いたけど、そう言う所もはるちゃんの保護欲を駆り立てるんじゃない？」

あさぎはそう言うと、あははと笑い、威三郎へ優勝の報告へ行つたのだった。

なぜ、そんなことを思い出したのかと思つてみると、威三郎が箸を置き、八千代を見ていた。

「あ、お茶ですか？」と尋ねると、威三郎は顎で頷く。旧態然とした男だと思ひながら、八千代は茶を注いでやる。威三郎は茶で喉を潤すと、珍しく言いよんどんだ口調で言った。

「八千代。後であさぎに、遙日の様子を見てくるよう言つてくれ。一度、帰れとも伝えてくれ」

そう言うと、威三郎は仏頂面のまま、八千代を見ずに箸を動かせた。

（——呆れた）

八千代はそう思う。

あさぎは今の今まで目の前にいたのだ。自分で言えば良いのにと八千代は思う。まあ、傭警の師範代もあさぎに奪われそうだと言う。日本剣道界の女神のように崇められるあさぎには、威三郎としては古い剣道家としての沽券があるのだろう。素直に祝うには威三郎の過去の名誉が邪魔をする。夫に哀れを覚えると同時に老いを見た気が八千代はした。

しかし、折角の休みに他県まであさぎに行かせるのはどうかと思う。無論、あさぎは頼めば拒まない。そこは遙日と対照的だ。そして遙日はあさぎにだけは逆らえないのだ。その遙日連れ戻して来いとあさぎに言うのは、あまりにあさぎを軽んじている。あさぎが哀れだと八千代は思う。威三郎も承知してなお、言わずにいれないので八千代に言を預けたのだろう。八千代は深いため息をついた。

威三郎は無言で朝餉を食べ終わると、おざなりに手を会わせ、無言で書齋に戻る。食器は置いたままだ。普段は何とも思わないが、流石に今日は、食器くらい片付けると八千代は思った。

食器を洗い終えた八千代は重い気持ちで、あさぎの部屋に向かうべく階段を上りかけて、ぞっとする思いで足を止めた。階段の上に巨大な龍が居て、それが八千代を睨んだ感じがしたのだ。

無論、龍など居ない。

往年の勘が八千代に戻っていた。龍はいない。が、まるで階上が氷室であるかのように、身が縮み、動きが止まるような冷気が階上から下りて来ている。何度か全日本大会に出た八千代にはそれが分かる。剣気だ。超一流の達人がそれを放つ。闘気でも怒気でもない。自身その者が抜き身の日本刀の一部になるまで鍛え上げた者のみが放つ気が剣気だ。相手を据え物にして只斬る。それは無念無想とは違う独自の境地である。無機質で、その氣に前では自ら刃の下に首を差し出しかねない気だ。故宮崎春雪はその氣を放てた。八千代も宮崎春雪以外にはその氣を放つ人物を知らない。そして春雪とて、常に剣氣を纏っていないかった。が、この圧倒的な質量の剣氣は何だ？ 八千代は震え上がる。同じ剣氣でも宮崎春雪が放つ物とは桁違いである。もう一段階段を上がれば、その澄んだ巨大な氷塊のごとき剣氣に包まれる。そうなれば、自分は息も出来ずに卒倒するだろうと八千代は思った。

今、上にいるのは愛娘のあさぎだけだ。

(これが、あさぎ?)

息を飲む驚きで八千代は思う。その氣は強大で剣氣を超えて神氣に近い。道理で無敵だ。人で相手が出来る筈も無い。

が、何にせよ、これでは上に上がれない。試しに八千代は娘の名を呼んでみた。と、巨大な氷塊のような気がすうと潮が引くように消えた。

「なに？ 母さん？」

明るい娘の聲が帰って来る。やはり、あさぎなのかと八千代は愕然とした。

「今、いいかしら？ なにかしてるの？」

「うん？ いいよ。別に」

階下から呼びかける母に不思議そうな声であさぎは答える。

八千代は恐る恐る階段を上がった。ちなみに、あさぎが帰ってからは鳴神家は収入が鰻登りで数年前に大きな武家屋敷のような家に建て直している。あさぎの部屋は南東の端で十二畳の畳部屋である。その部屋の前で八千代は息を飲んだ。先程の様に触れば死ぬような剣氣は無い。それでも入るのを躊躇う剣氣は漏れている。あさぎの部屋から。

「入って良いかしら？」恐ろしくて声をかけずにいられない。

「娘に何、遠慮してんのよおー」

くだけた娘の聲が答える。が、剣氣は消えない。

ままよと襖を開けた八千代は「——ひっ！」と声にならぬ悲鳴を上げて腰を抜かした。

あさぎはスエットスーツであぐらを組んで、八千代に背を向けている。つまり窓に向かつてあぐらを組み、無造作に抜いた菊一文字を左手で掲げ、その刃紋を陽光に翳して見ていたのだ。が、八千代には部屋に入った瞬間、その切っ先が喉元に伸びた様に思えたのだ。

「あれ？ ごめん。驚かした？」

てへへと笑い、あさぎは刀身を鞘に収めた。八千代は心底ほっとした。漸く口がきけるよ

うになった。

「で、なあに？　母さん？」

あさぎは剣を手前に置くと、胡座の姿勢は崩さず、上半身のスクラッチをしながら尋ねる。八千代は口籠もりながら言った。

「あの、あさぎ。折角の休みに悪いのだけどね——」

威三郎の言を告げると、あさぎは嘆息して言う。

「はるちゃんだって、遊びに行っているんじゃないのに……。父さんも歳なのね。行くわ。私も天野さんには会いたいからね」

——でも。

あさぎは言葉を繋ぐ。

「天野さんが困るようなら、連れ帰るのは無理よ。もう、嫁に出した様なものなのだから……」

「そんな話は認めてないわ」

八千代が無然と答えると、あさぎは苦笑して頭を掻く。

「母さん、高校卒業した者同士が一緒になると言えば、反対なんか出来ないわよ。ああ、わたしも男欲しいな」

くだけた口調で本音を漏らしたあさぎに、八千代は何とも言い難い気持ちになる。男が出来れば、あさぎも家を出る気なのかと思うとやり切れない。

あさぎは手前に置いた菊一文字をぼんと叩く。

「この刀の手入れしたら出かけるわ。彩宮の和菓子で良いよね？　お土産？」

「あんな高級店——大体、あそこは予約した分しか作らないお店でしょう？」

「表向きはね。わたしの顔なら、お土産程度揃えてくれるわ。それにね母さん、日本画の世界はどんな大物が来るのか分からないのよ。何時でも一流品でお持てなし出来ないとな大成しないのよ」

それは分かる。身に浸みて知っている。希にあさぎに來客が鳴神の家に来ることがあるが、尋常な身分の方では無い。あさぎは振り袖で出迎え、茶を点ててもてなすが、茶道具は昔の公家が柳生家に献上した代物で、博物館クラスである。茶碗も一個で豪邸が建つ様な代物をあさぎは平然と使うし、相手も価値を理解し褒めるが、平然と使う様な人物だ。柳生が何故、あさぎにこう言う品を譲ったのかは、あさぎの将来を見越していたからだろう。故にあさぎに來客がある時は威三郎も八千代も生きた心地がしない。遙日は身分や年功序列を気にかける娘では無い。乞われて同席しても対等に振る舞う。そう言う遙日の態度に毎度肝を冷やす八千代と威三郎だが、なぜか遙日の振る舞いはそう言う貴人には高く評価され、愛されるのだから世の中は分からない。

「すまないけれど、お願いするわね」

八千代はあさぎの背中にお辞儀して立とうとする。あさぎは黙って頷き、又、菊一文字を抜いた。八千代はそれにビクリと身体を強ばらせる。退室しようとした所に、何気ない口調で刀を見つめたあさぎが言う。

「ああ、母さん——」

「な、なに？」

八千代は身構えてしまった。その気配にあさぎが苦笑するのが分かる。

「わたしはさ。この家の娘だよ。それ以上でも以下でもない。だから、母さん——」

八千代は息を飲む。

「せめて母さんだけは娘として見てね。でない」と——

その先の言葉はあさぎは飲み込み言わなかった。八千代はあさぎの抱える孤独のあまりの大きさを見た気がした。だから、背筋を伸ばし、凜と言い放った。

「馬鹿言うんじゃない。貴女は生まれる前からわたしの娘よ。だから——」

そこで八千代は茶目つ気を出せた。

「男が出来ても簡単に手放さないわよ。覚悟しない」

あさぎはカラカラと笑った。

「そいつは参った。早く相手を見つけないとね。親子喧嘩も出来ないや」

八千代も笑うと「そうよ。早くしなさいよ」と答え、部屋を出た。あさぎは遂に振り返らなかつた。

階段を下りながら、八千代はかつて自分があさぎがひまわりの様だと自慢したのを思い出した。それを遙日が否定した。あさぎは花に喩えるなら曼珠沙華なのだと言ったのを思い返した。

遙日の真意は分からない。だが、今のあさぎは確かに曼珠沙華かもしれないと八千代は思った。その美しい鮮烈な朱色の花は人をして魅了せずにはいられない。しかし、近づき愛でたり折るような真似が出来ない。この世に在りながら、異界の美を示す孤高が曼珠沙華にはある。

あさぎは何時、男を連れて来るだろう？

八千代は祈るようにその時を期待した。

(了)